



今探
〜



〜
探り合い
〜

一、面倒

梅雨入りを控えた月曜日のことだった。早朝から新体育館に集められた生徒達。ざわつく中、校長に続いて数人の生徒がステージに上がったところで喧騒がやむ。

いつもなら月初めが全校集会で朝礼なのだが、校外におけるスポーツや文芸の表彰がある場合、臨時で翌月曜日に集会が行われる。

今回は七夕を先立ち天の川作文コンクールの表彰について。壇上には三組の高島睦美、一組の中倉綾子が居た。

「……表彰状、高島睦美殿、貴女は天の川作文コンクールにて非常に素晴らしい文章を納め、ここに表彰します。夜空に輝く星々に負けない才能をこれからも磨き、輝かせてください」

校長の言葉と同時に拍手が起こる。高島睦美は緊張した面持ちでそれを受け取り、深く、ぎこちないお辞儀をした。

「……続きまして、表彰状、中倉綾子殿、貴女は天の川作文コンクールにて類まれなる文章を納め、ここに表彰します。青々と伸びる竹に負けぬよう、今後もその才能を伸ばしてください」

再び拍手が起こる中、綾子は深くお辞儀をし、賞状を受け取る。賞状授受を受けた二人は生徒達に向きなおり、軽くお辞儀をしてステージを降りた。

「すごいねー、綾子、作文で優勝だって」

「バカ。優勝なんて無いでしょ。誰と戦うのよ」

訳も分らず表彰されたことで凄いことだと思つた愛は猿のおもちやのようにばちばちと拍手していた。そんな彼女のため息混じりに訂正をする百合子は醒めた目線だった。

「……っていうか、生意気じゃない？ なにあの服」

「……そうよね。いつまで転校生のつもりなんだろね」

後ろではヒソヒソ声がある。高坂瞳と若林芽衣だ。二人とも綾子が表彰されることが面白くなく、さらに彼女が受賞において身に着けた服装が気に食わないのだ。

睦美の服装は鬼瓦校の制服だ。紺のセーラー服とプリーツスカート。リボンもあまり派手な色合いではなく、そのまま葬式に向かっても違和感の無い色合い。基本、着ることが無い為レンタルで済ませる子が多く、睦美のそれもOGのおさがりだ。

百合子も水泳大会の表彰の際はレンタルしたことがあるが、色々きつかった。睦美もおそらく同じ感想を持っているだろうと胸元を撫でる。

対し、綾子が着ているのは彼女の前の学校の制服だ。

ベージュ色のブラウスとサスペンダー付きのスカート。まるでアイドルのようなふわっとしたもので、女子の中には羨ましそうに見ていた。

村の子は普段から村唯一のファッションセンターで大量生産、大量消費の適当なロゴの入った衣服しか着ていない。それに対して綾子の私服は村外のお店で購入したものだ。表彰の時でも前の学校の制服を着るあたり、村に馴染まない意思が明白だった。

それが田舎者である芽衣や瞳の癪に障ったらしく、先ほどから。ちやくちや文句を垂れている。

そんな彼女たちを後目に百合子は視線を泳がせていた。たかだか制服ぐらいでひがむこともない。自分も前に読者モデルをした時にカメラマンから衣服を貸してもらったことがある。写真を撮った後はそのままギャラ替わりにもらえたし、羨ましいなら隣町まで行けば良い。その程度の意識だった。

「……っていかさ、なんでさつきは辞退したのよ」

「……え？ 私は別に……そんなこと……」

瞳はクラス委員の中川さつきに水を向ける。百合子も気になり耳を澄ます。

「だってさ、本当ならさつきが代表だったんじゃないの？」

「そんなこと……ないよ。別に……」

「っていかさ、絶対さつきのほうが良かったよね。綾子のなんて適当なきれいごと並べただけじゃん。心が籠ってないよ」

「そうそう。惜しかったよね。本当ならさつきが受賞してたのにさ」

「……」

褒め殺しされるさつきは照れているのか、それとも本当に困っているのかわからない。

「……ねえねえ百合子、どういうこと？」

「さあ？」

気になったのは愛も同じらしい。

作文コンクール程度、担任の考え次第でどうにでもなる。

綾子が勝行になにかしら働きかけて自分を選考させた。

そういう噂があった。というか、瞳と芽衣がそう思い込んでいる。

百合子としては懐疑的であった。勝行と綾子の普段の関係を見ていればそんな取引をするような印象が無く、綾子側にも勝行側にも何のメリットも無い。

さつきのように受験する目標があるのなら内申書のこともあるが、綾子はそのつもりが無い。そもそも普段の態度がお世辞にも褒められたものでなく、推薦書に何を書かれるか……。

「それでは順に退場するように」

壇上の二人が戻ったところでぞろぞろと戻っていく。睦美はレンタル品なので着替えてから戻るようだが、綾子は今日一日前の学校の制服で居るつもりらしい。

それを見て瞳と芽衣は何かを思いついたのかクスクス嗤っていた……。

着替えを終えたら急いで教室に戻る。今日は夏休みの計画表の提出日。どうせ三日坊主に終わる計画など去年のコピーで良いのに律儀に集めなければならないのがクラス委員の仕事。

睦美は走っている内にずれたやや大きめのブラの肩紐を直していた。

「お姉ちゃん……」

すると階段の手前で弟の高島まさるが居た。

「まさる、どうしたの？」

「あの、忘れ物しちゃって」

「忘れ物？ 何？ いつまでに必要なの？」

「えと、五時間目までなんだけど教科書を……」

「五時間目？ どこにあるか覚えてる？」

「机の上。宿題のノートも」

昨日の夜、睦美はまさるの宿題を見ていたのを思い出す。根気よく教えて今日こそは完璧に仕上げ、忘れまいと意気込んでいたまさるだったが、どうやら入れ忘れた様子。

前日にしっかり準備をさせておけばと思うも、昨日は宿題の指南と自分の勉強で忙しく、終わった頃には疲れて眠ってしまった。

自分の甘さと弟のうかつさに頭を抱えつつ、「ここで怒鳴ってはせっかく昨日頑張ったことが無駄になる。ただでさえ甘えん坊で自信の無いまさるのことだ。卑屈になりかねない。

「あとでお姉ちゃんを取りに戻るから。大丈夫だよ。えとオレンジ色のノートだよね」

「……うん」

涙を見せつつあったまさるを宥めつつ、昨日の勉強ノートを思い出す。

「大丈夫。ほら、泣かないで。今日こそ先生に宿題やってきたの見てもらおうでしょ」

「……」

こくりと頷くまさるにほっとする。ただ忘れただけならともかく、昨日は必死で勉強したのだ。その成果をいつもの態度を理由に 「やってないのに忘れたと嘘をついている」 と思われたくない。

睦美は昼食からの帰宅、登校までの行動予定を思い描く。

大丈夫。長い休み時間の間なら戻って来られる……。

「ねえ、中倉、その制服おしやれだね」

休み時間、綾子がトイレに行こうとすると芽衣が声を掛けて来た。

「そう、ありがとう」

どうせ裏があるのだろうと取り合うつもりもなく軽くあしらう綾子。

「いいじゃん。見せてよ。あたし、そういう制服とか憧れてるんだ。ねえってば」

「制服なら鬼瓦校のがあるでしょ？ 私は着ないけど」

あからさまな侮蔑に対し芽衣は眉間にしわを寄せる。だが、ここで怒っては相手のペース少して良いから機嫌を取って連れ出したいから我慢する。けれどそんな態度は普段の態度から悟られていることに気付いていない。

「少しだけ見せてよ。どうなってるの？ ねえってば」

「どうも何も普通の制服。変形するとも思ってるの？ 飛行機とか？」

「な！ 誰もそんなこと言ってないでしょ！ ったく、そうやってすぐ人のこと馬鹿にして！ あんた生意気なのよ！」

「それはお互い様じゃない。私、急いでの。邪魔しないで」

「ふーん、そんなに便秘が酷いんだ？ 便秘綾子」

「あら、はしたないわね。誰がいつトイレに行くと言ったかしら？」

「そうだよ。綾子はいつも連れションだもんね。誰かと一緒じゃないと、トイレにもいけないビビりだもんね」

「そういうあなたこそ、高坂さんが居なかったら何もできないんじゃないかって？」

「な、誰が！ あんたみたいな小心者と一緒にしないでよね！ ったく、都会モンはこれだから！」

「まあ怖い。わたくし、田舎者の風習には疎くて……」

地団駄踏み始めたところで綾子は勝ちを確信して去っていく。行き先は当然トイレ。

「待ちなさいよ！」

真っ赤になった芽衣が綾子の腕を引っ張る。

「なによ。やめなさいよ。乱暴なことは……」

そろそろ面倒になり始めたところで綾子も声に怒気を込める。が、すぐにネコナデ声を出して逆に驚かせる。

「乱暴しないで放してくださいさらない。助けて……昭利！」

「……」

廊下を歩く昭利を見つけた綾子はあたかも虐められて困っていたとでもいうように駆け寄り腕を取る。

田舎暮らしが長くなってきたとはいえ他の子に比べれば色も白く、髪の手入れなども行き

届いている。普段を知らなければ都会の学校の制服を着ていることもあってお嬢様ともいえずなくもない。そう、普段の彼女を知らなければ……。

「なんだよ、気持ち悪いな。何が助けてだよ俺の方こそ助けてくれよ。お前みたいな奴に絡まれて迷惑だつての」

名指された昭利は仕方なく綾子の方へとやって来る。その顔は渋面というにふさわしく、手はポケットに入れたまま……。

理由が無ければ絡みたくない。けれど向こうから都合をつけて嫌がらせに来る。そのまま無視して通り過ぎたいけれど、腕を掴む彼女の手は見た目に反したしっかりした力を感じる。

「さつきから若林さんが意地悪して……。私トイレに行きたいのに邪魔をするのよ」

「やっぱりトイレじゃん！」

「ふーん、なんだかなあ……。んでもま、漏らされたら困るし、若林さんもこいつに用があるなら用を足してからにしてあげなよ」

「なによ、関係無いでしょ、引っ込んでなさいよ。あ、それともあんた、もしかして綾子のこと好きなわけ？」

「なに言ってるんだか。まったく、こんなわけわかんねーやつ、お断りだよ。むしろ若林さんのほうがよくわかってるんじゃないの？」

「なに？ 言いがかりはよしてよ。兎に角、少しぐらい付き合いなさいよ」

「あん、助けて、昭利」

「その気持ち悪い声やめろつての。まったく、というわけだから、一旦放してあげてよ。後でちゃんと若林さんの用件に行かせるから」

「……なによ、ちゃんと庇いなさいよね。頼りない男ね」

渋面の昭利に言われ、人目が増えてきたこともあり、芽衣もやりづらくなる。だが一応の約束は取り付けたのだからと一旦手を離す。

「約束よ。ちゃんと来なさいよ」

「ええ、わかったわ。若林さん、本当に意地悪なんだから……。昭利君のいじわる。見損なつたわ」

わざとらしくメソメソする綾子だが、昭利より背の高いせいでそれが嘘泣きだとすぐにかる。

「まったく、何が見損なうだよ。そのまま見限ってくれて結構だつての……いちっ！」

トイレに駆け込む綾子だが、去り際に昭利の足を思い切り踏んでいて……。

昼食時、睦美は恥も外聞もなく急いで食べていた。しかもなぜか体操着。本人は着替えを汚してしまったからと言っていた。

クラス委員として模範的な彼女が胸を叩きながら牛乳を飲む姿はまるでアマゾネス。普段を知る同級生からしたらその豹変ぶりに啞然とさせられる。

「……ふう、すみません、ちょっと保健室に……」

食器を片づけると今度は急いで教室を出る。隆は呆気にとられ、何も言えずにただ頷いていた。

階段を走り降りる。制服から着替える時にブルマにしたおかげで足取りも軽い。これなら余裕を持って家に戻れる。

本当ならお昼ぐらいのんびり食べていたいし、できればこっそりお代わりもしたい。けれどそんな時間も無い。家に帰れば何かおにぎりでも隠し持って来よう。そうすれば午後も何とか保てそう。

今日はクラス委員の会議、提出物のチェック、教室の掃除、弟の迎えといくらもある。それがあの程度の昼食では足りるはずがない。そうでなくても最近はお出るところが出てしまい、走るの辛い。正直、貧相な子が羨ましい……。

ブルマと体操着で走りやすくしているけれど、男子の視線を何度か感じた。デブ眼鏡の学級委員と陰口を叩いているくせに性的な視線で見ってくる男子達。今日はおさがりのブラジャーを付けたけれど、横幅が広くてカップが小さいせいでずれてばかり。

体操着もくたびれが見えてきて袖という口が広がっている。できれば買い替えたいけれど、来年には卒業。弟は使えないのだし、家計を考えると新しく買って欲しいなどと言えない。パンティだけは新しいのを買ってもらえて喜ぶ程度なのだから……。

「……！！……！！」

走り、昇降口から飛び出していく。日差しは強いが、風が無い。帰りはどこかに自転車を隠しておこうと思いつきながら家路を急いだ……。

家に着くなり手を洗う。おにぎりを握ってサララップに包む。ノリは贅沢言っていない。勉強部屋に行きオレンジのノートと教科書を手にする。適当な袋に突っ込み鍵を掛けたか二回確認。自転車を隠せる場所は学校裏に隠しておく。大丈夫。今時電動機どころかギアチェンジもできない自転車など盗まれない。

「……はあはあ……」

汗を流しながら昇降口に戻って来た睦美。膝を抑えてしばらく息を整える。

汗が目に入り痛い。まだ教室は昼食だろう。校内放送が聞こえている。

これなら十分に間に合う。ここまで急ぐ必要も無かった。杞憂に終わった焦りをため息で吐きだし、弟の教室に行こうとする。

「高嶋、なにしてたんだ？ 今は昼食の時間だろう。それにどうしてそんな恰好なんだ？ 今外から戻って来たよな？ 何してたんだ？」

すると誰かに呼び止められた。振り返るとそこには勝行が居た。彼は腕組みをし、何が不満なのか苛立ち混じりに舌打ちをしている。

「その、忘れ物を取りに……」

「忘れものだと？ まったく弛んでるぞ。賞を取ったと思ったらこれか。お前はいつも肝心なところで抜けているんだ。クラス委員の仕事ももたもたしていつも遅くまで残っているし……。いいか、世間じゃ残業をするだけ頑張ると言ってるが、そんなのは時代遅れなんだ。今の時代は効率化。わかるか？ 効率化。高島みたいに無駄に残ってるようなのは時代遅れなんだよ」

「はい、すみません……」

軽く頭を下げる睦美だが、勝行は不機嫌なままだ。

「そうやって謝ればいいと思ってるのか？ まったく成長しないなあ……。謝る時はちゃんと頭を下げなさい」

「……すみませんでした……」

頭を深く下げる睦美に勝行はしばし無言になる。頭の角度で一体何かわるというのか……、睦美はさっさと弟の教室に行きたいと思っていた。

「大体だな、高島は……」

だが、勝行の話はまだ続く様子。こういう蛇の生殺しというか猫が獲物をいたぶる態度が嫌いだった。

「まあまあ、岩村先生、その辺にして……」

「あ、これは篠田先生……。私はですね……」

見回りでもしていたのか信行がやってきてとりなしてくれた。学年主任の信行はお昼を職員室で過ごす為、早く食べた後は配膳室の手伝いをしている。今ここへ来たのも向かう途中だろう。

「高嶋君、すごい汗だね。何を忘れたのかは知らないけど、気を付けるんだよ。汗もすごい保健室でタオルを借りてくるといい。それと、作文コンクール、おめでとう」

「あ、ありがとうございます」

二重の意味でお礼を言い、睦美は廊下を走る。

「こら、廊下を走るんじゃない」

「まあまあ、先生、そんなに怒らずに……」

背後ではまだ何か難癖を付けられないかと勝行が憤っているが、立場が上の信行にはそれ以上何も言えないようだった……。

授業も終わり掃除が始まると、採点作業のある隆は職員室に行く。それを見ていた生徒達はおしゃべりをしながらだらだらと作業していた。

普段なら15分程度の作業もふざけながらだとなかなか終わらない。

「ちよっと皆、ふざけないで真面目に掃除してよ……」

クラス委員の睦美は呆れながら一人必死で掃除をこなしていた。

今日はこの後、夕飯の買いだしをする。それが終わってから自分の勉強と弟の面倒を見る。両親は遅いだろうから夕飯も自分達だけで食べる。

■■■■のまさは幼い頃から親が近くにいないせいか、年齢のわりに幼さが残る。友達も少なく、何かあると姉である睦美を頼るクセが付いていた。

本なら自立してもらいたいのだが、言葉を投げつけただけで成長してくれるはずもなく、今日も仕方なく子守の日々。

「萩さん、バケツ変えてきて。沢森さん、机運んで」

「はい」

名指しで指示を出し、自分も机を運ぶ。こういうことをするから周りからインチョと揶揄されるのだ。クラス委員だからではなく、偉そうに振舞い他人を顎で使うという蔑称。真面目にやるべきことをしているだけなのに……。

「お、おい、バケツ、俺が持つよ……」

なぜか残っていた高尾春樹が千夏の手伝いをしようと駆け寄っていく。

「いいわよ。あんた違う班でしょ」

せっかくの申し出を千夏は一瞥もせず去っていく。男子嫌いというわけでもない千夏にしては珍しい塩対応。猫の手も借りたのにも思っても口出しするだけ時間の無駄と飲み込む。「待てよ。俺が持つって……」

それでも駆け寄る春樹が意外だった。

春樹は掃除を手伝うような優しい性格でも真面目でもなく、誰かに掃除当番を押し付けられるほど弱腰でも無い。その彼がわざわざ手伝うとなると千夏に好意を持っているのだろうか？ ありえない。二人は体育館の使用、片付けでかなりトラブルを起こしていた。それは好きな子だからケンカするという沢森明日香と中村昭利のような関係ではなく、本当に嫌いかつてのこと。

それがこうして掃除の手伝い合い。一体何が起きたのやら……。

「……」

その向こうでは昭利がわざわざ手伝ってくれていた。どうせ明日香が目当てだろうと思うも、最近どうも二人ともぎこちない。

少し前までなら仲良く喧嘩していたのに、ここ最近はお互いを刺激しないようなよそよそ

しい会話ばかり。天気がどうのなどとまるで会話の無い夫婦のよう。熟年離婚とからかわれるも意気消沈してからかいがいも無かった。

「おら、真面目にやれよ」

それとは別になぜか緒方大輔まで手伝っている。しかも昭利を挑発するかのように彼を急かし、わざとだろうけれど何度も椅子の足をぶつけていた。

チビでも喧嘩っ早い昭利のことだからいつ大事になるかわからないとひやひやしていたが、今日は終始睨むにとどまっている。喧嘩なら自分の居ない場所、時間に思い切りやってもらいたいので、彼が我慢してくれるならありがたかった。

「ふう……」

そろそろ終わったところで、後は教壇と黒板、机を拭くぐらい。一体どこまでバケツの水を変えに行ったのだろう、千夏たちが遅く感じた。

「遅いわね。あたし、ちよっと萩さん見て来る」

油を売るような性格でもないだろうと気になって見に行く。もしかしたら春樹と喧嘩しているのかもしれない……。

睦美が水場へ行くと、思ったより人が居た。

ほとんどのクラスは掃除を終えており、今更水を使う人も居ない。はずなのに、なぜか一組の女子数人が居る。クラスを越えて喧嘩でもしているのだろうかと思うも、どうやら一組の女子同士の紛争の様子。

「萩さん？ どうかしたの？」

「え？ あうん。ちよっと水が詰まったみたいで……」

「ああ、そうだったの。じゃあ、下の階で汲んで来たら」

「そっか。そうだね。ごめん、気付かなかった」

千夏は言われて思いついたのか、バケツ抱えて階段を降りる。

「あ、ちよっと待てよ……」

「……」

春樹はそれを追うが、一体何があったのやら……。

「……」

後は関係無いだろうと睦美は背を向ける。けれど……、

「おい、一体何をしているんだ！ 高島、説明しろ」

騒ぎを聞きつけてやって来た勝行はなぜか争っている一組女子より睦美に向かって言う。

「あたしは知りません。来た時には彼女たちが……」

高坂瞳と若林芽衣、そして中倉綾子。未だにあの制服を着ていたのですぐにわかった。

「おい、高坂、若林、どういうことなんだ？ ちゃんと説明しなさい」

「先生、中倉さんが掃除さぼるんです」

「さぼりです。制服汚れるからしたくないって！」

「ふん、当たり前じゃないの。そもそも貴女達がバケツ交換しに行ったのでしょ？ 最期までしなさいよ」

「だって、しょうがないじゃん。アタシ達、手、怪我してるんだってば。汚れた水に触りたくないし」

「ねー」

二人ともこれ見よがしに包帯をしていたが、その巻き方があからさまに雑で目立ちすぎていて、養護教諭の元治の仕事とは思えない。

「ならゴム手袋でもなさいよ。私は関係無いわ」

「この調子なんです。ちょっと手を入れて栓を抜いてくれるだけでいいのにさー」

「ほんとほんと。いっつもこの調子。全然手伝ってくれないですよー」

「おい中倉、お前も掃除当番なんだから協力しないか！ 全くいつまでたっても協調性の無い奴だ。そんなんじや碌な人間にならないぞ。ほら、少しぐらい汚れたっていいだろ。早く栓を抜きなさい。なんだ、そのぐらい。腕まくりすればいいだけだろう」

二人がかりで綾子を批難する瞳達。二応の理由もあり、綾子への印象が悪い勝行はこれ見よがしに彼女を叩こうとしているのかもしれない。

「嫌です。二人が当番なんだからしっかりやってください」

「我儘を言うな。とにかくやれ！」

「嫌です」

勝行相手に怯むことの無い綾子。気丈な彼女が凄いのか、生徒に舐められる勝行が情けないのか……。

睦美はため息交じりに歩み出ると、汚水の中に手を突っ込む。そして栓を抜いた。すると何かがぼこっと音を立て、水がばしゃつと跳ねる。

「きゃっ……！ もう……」

砂利混じりの汚水がどばつと服、眼鏡、スカートと容赦なくかかる。

「やば……」

「んもう、誰よ、こんなイタズラしたの……」

線を抜くと同時に汚水の中の何かが破裂して水しぶきが上がる細工がされていたようだ。少し前に風船を入れてふざけた子が真一にこっぴどく叱られていたが、それと同じらしい。

「……」

頑なに栓を抜かせようとしたのはこれが理由なのだろう。睦美は二人を睨むもしらはっくれている。

二人とも親がPTAの役職についているせいか勝行は何も言わない。かといって汚水を掛け合うような文字通り泥仕合もしたくない。ここは気にしていない素振りをしてくだらないイタズラをしている幼稚さを嘯みしめてもらいたい。もっとも、それで殊勝な態度を示すような二人でもないけれど……。

「使うなら使いなさいよ。あんまり遅いと明日の朝になるわ」

ハンカチを取り出し眼鏡を拭く。砂利が混じっていると傷がつきそうで嫌だが、水で洗い流すようなことをしても恰好がつかない。

怒鳴るだけで何もできない無能といたずら失敗の幼稚な二人を後目に去ることにした。

「もう、しつこいってば。こんな手伝ってもらわなくていいから」

「いや、その……だから」

「ねえ、ちなっちゃん、少しぐらい話を聞いてあげようよ……」

階下から千夏と春樹、それに遠藤滯の声がした。

「滯、そいつの肩持っ気？ あんたねえ、こいつのせいで嫌な目に遭ったの忘れたの？」

「それはそうだけど、あれはウチらにも原因あったしさあ……、少し話だけでも聞いてあげようよ。少しは歩み寄らないとさー」

男子とわけ隔てなく仲良くできる性格の滯だけれど、ここまで千夏に敵意を持たれて春樹を擁護する理由がわからなかった。

普段自分のことで忙しい忙しいと思っていたけれど、クラスというのは数か月もすれば人間関係に変貌が見られるものと改めて思わされる。

その一方で相変わらず弟のこととクラスの雑用にこき使われる自分はなんともつまらないものとも感じた。もつとも、煩わしいことが増えるだけなら今のままで良いのかもしれない。そう達観できる自分が寂しかった。

「なあ、少し話を……」

「うーるーさーい！」

階段に響く声に階上からも視線が集まって来る。ひょこつと顔を出した昭利は騒ぎの面々の中に面倒なのを見つけて額を叩くと降りて来た。

「おい、イインチョコ？ ん？ なんだよ、どうしたんだ？ ん？ おい、また中倉が何かしたのかよ。今度はなんだ？ ったく、少しは大人しくできないのかよ」

昭利は綾子の姿が近くに居るのを見て騒ぎの原因と誤解したらしい。

「あら、心外ね。この二人が勝手に喧嘩ふっかけてきただけよ」

「ったく、喧嘩吹っかけられないようにしろよな」

「私ぐらい魅力があると妬まれやすいのね。やっぱり美しさって罪よね」

「はいはい……って、おい……あぶな」

「離れなさいっての！ って、あ……」

「ちよ、やべ……」

話を聞いて聞かないのやり取りをしていた千夏と春樹。二人がバケツを取り合っていたのが少しのタイミングのずれで空に放られる。バケツは綾子を目掛けて放物線。いくら嫌な女でも女は女、昭利は持ち前の俊敏性を活かして綾子をバケツから庇う。

「きゃっ！」

「うわっ！」

バケツを足で受けるも中身は……。

「やば……」

「げ……」

バケツの水はざばっと昭利、綾子、睦美に降り注ぐ。

「あはは、いい気味」

「ふふ、あたしたちのせいじゃないしー」

「お前ら！ 一体何をふざけているんだ！！」

その一部始終を止めずに見ていた勝行は愉快そうに怒鳴っていた……。

「……ええと、つまり、高尾君がバケツを代わりに持つてあげようとして萩さんが拒んで、それが中倉さんのほうに飛んで、中村君が庇ったけど中身が……」

職員室から急遽呼ばれた隆は状況を整理して領いた。

「全く、いつもふざけてばかりでけしからん奴らだ。今日はしっかり反省してもらおう必要がある。今から居残りで……」

「まあまあ、岩村先生、皆も水に濡れて寒いし、このまま残しても風邪をひいちゃいますよ。今日は穩便に……」

「志垣先生、そうやって甘やかすからこうやってふざけてですね……。まったく作文コンクールで賞をとったからと言って浮かれて……。いいか、そうやってふざけている内は未熟者なんだぞ。いつまでそんな遊び半分で生きてるんだ。真面目にやりなさい。お前達は普段から授業態度も悪いし、教師を舐めてかかっている。そういうのが今日のこの無様な姿なんだぞ。大いに反省しなさい」

「……」

毎度の長丁場の怒鳴り声に生徒達はうんざりした様子。

多少の反省はあるものの、それよりもまず水の滴る状態を何とかしたかった。

「それじゃあ後は僕が見ておきますので、岩村先生は職員室にお戻りください。あとで反省文なり書くよう指導いたしますから……」

「ったく、しょうがない奴らだ。志垣先生もしっかり指導してくださいよ。少しでも目を話すところには確なことをしない」

「はい、わかりましたから……」

隆は平謝りをしながら勝行を見送ると、生徒達に向きなおり、ふうとため息をつく。

「散々だったね……」

互いの感想だった。

昭利、睦美、綾子は保健室へ行きタオルを借りて体操着に着替えていた。

「ったく、なんで俺まで……」

掃除を手伝っていたのにこの結果。最近はとにかくついていないと嘆く昭利。

「中村君、ありがとうね。もし庇ってくれなかったら水だけじゃすまなかったし」

「あ、いや、委員長が気にすることじゃないって。悪いのは萩と高尾だ。ったく、あいつらつまんねえ喧嘩なんてしてさ」

「ふふ、昭利もでしょ？」

にやりと笑いながら横目で昭利を見る綾子。それは睦美も気にしていたことであり、二人の視線が彼に向かう。

「俺は別に……明日香とは何も……」

凶星のようで、誰も口にしていない明日香の名前が出てしまう。

「誰も沢森さんのことなんて言っていないけどー？」

「うっせえな……ったく」

「あーあ、それにしても制服……酷い汚れ……ったく、どうしてくれようかしら……」

「中倉さんの制服、前の学校でしょ？」

汚水と言うほどでもないが綺麗とも言えない水を被ったことで変に染みができそうになっていた。綾子はそれほど気にしている様子も無いが、鬼瓦校のそれに比べると作り込まれている制服が汚れてしまうのは他人の物でももったいなかった。

「どうせ今年で捨てるつもりだったし、気にしてないわよ」

「そう……でも」

村のファッションセンターでしか着るものを買えない睦美にとっては羨ましいとしか感想が無い。だが、いくら悔やんだところでこれがもらえるわけでもない。結局はただの貧乏性からくる気持ちだった。

「あの……」

扉が開き、千夏と春樹が隆に連れられて顔を出す。

「ごめんなさい……。私達がふざけたせいで、その汚しちゃって……。クリーニングするから……その……預らせてください……」

「あら、殊勝な態度ね。さあね、どうしようかしら？　そこまで気になるわけじゃないし、

萩さんが私に素直に謝るところを見たから……、もつと頭下げなさい。うふふ」

「おい、中倉……ったく……」

あまり仲の良いくない二人だけに今回の騒ぎは綾子にとって愉快的痛手だった。頭を下げつつも歯ぎしりしつつ悔しきで震える千夏だが、それを口には出せない。

「すまん。俺が、ふざけて……だから、俺が弁償するから……」

「弁償っていうけど、制服なんだからけっこうするのよ？　お年玉が無くなるわよ？　ま

あ、そうね……。あんたが私の小間使いになるなら、許してあげるけど？」

「それが嫌なので弁償でお願いします」

「ふん、つまらないわね……」

「はは……」

「まあま、そこら辺で許してあげて欲しい。今回のことは僕の監督責任もあるから、友達同士で弁償だのクリーニングだの言わないで、僕が責任を取る。それに村のクリーニングじや色落ちとかあんまり丁寧にしてくれないから……、先生な街のしっかりしたクリーニングのお店に直接依頼できるよ。だから僕に一旦預らせて、それで一つ手打ちにしてもらいたい。いいかな？」

「良いチャンスだと思ったのにね。いいわ。志垣先生、お願いします」

「うん、任せてよ。そうと決まったら早速クリーニング店に連絡いれないと……。品が品だから少し日数がかかるかもしれないから、そのつもりでいいかい？」

「別に使う用事も無いわ。誰かが死なない限りね」

「怖いこと言うなよ……」

「そう。でも、中倉さんのことだから、何かまた賞を取るかもよ？」

「あら、そうね。その時までには仕上げて欲しいわ」

「仰せのままに」

恭しくお辞儀する隆に笑いが起きていた……。

「はあ……。どうしよっかな、俺……」

放課後、閑散とした教室で春樹が項垂れていた。

今日は男子バレーボール部の練習日。先日の勝負の結果の歩み寄りで体育館の割り当てが変更された結果だ。

本来なら春樹にとって喜ばしい結果なのだが、使用許可が下りたところで参加者が少ない。今頃は坂田広樹と笠原雄太がネットの設置などを行っているだろうけれど、俄然部員が少ないのだ。

三人でトスをしてアタックの繰り返しで得られる練習成果も乏しく、なんの為に権利を得たのかわからなくなる。

「元氣出しなさいよ。男でしょ？」

そんな彼を見下ろす滯は腰に手を当てふんぞり返る。男子部員が少ないことを見越していた彼女は麻帆と一緒に練習に参加するつもりだった。

「高尾君、千夏ちゃんもわかってくれるよ。だから、あんまり落ち込まないで。ね？」

滯の執り成しで麻帆は春樹の謝罪を受け入れてくれた。彼女に恥ずかしい思いをさせたことを謝り、かつ、今後はバレー部の発展の為に協力すると約束した。その真摯な態度で彼女も頷いてくれた。と春樹は思っている。

「せっかく体育館使えるんだし、練習しに行こうよ。私もいろいろ勉強になったし」

「ああ、すまん」

「もういいよ。何度も謝らないで」

麻帆はにこりと微笑み促してくれる。改めて優しい彼女に春樹は自分の浅はかさと抑えられなかった欲情を恥じた。

「さ、練習いこー」

「おー」

声出し新たにコートに入る春樹。くよくよしてもしようがないと割りきり、頬を叩いてボールをトスした……。



体操着姿でコートを行き交う女子二人。お尻がぶりぶりふられる姿を見てこの前の練習試合を思い出してしまう。

丸みのある柔らかそうなお尻。膨らみ始めたおっぱい。乳首を擦ると高く耳障りな声で喘ぐ。

濡も可愛らしかったが、麻帆も魅力的に思えた。今日はブラを忘れたのだろうか。体操着から少し透けていた。もし触れるなら揉み扱きたい……。

「菅井、お前トス上げてよ。遠藤はアタックして。俺ちよつと練習したいんだ」

「うん。いいよ」

あくまでもまともな練習内容の提案。麻帆は笑顔で頷き、コートの反対側へ向かう。

少し前から気付いていた。彼女の体操着の首裾が若干緩い。それにブルマからこぼれる水玉模様の布地。そこで思いついた。

「よし、頼む」

ボールを転がし彼女をわざと前傾姿勢にさせる。思った通りだった。彼女は今日下着を着けていない。結局は欲望を捨てられない春樹はチンポのポジションを直しながら麻帆を見ていた……。

練習を続ける中、石渡直美と高峰理恵が顔を出していた。彼女たちは今日も女子バレーボール部の練習だと思っていたらしく、体操着姿だった。

最初は春樹を見て不審そうだったが、真面目な広樹と、麻帆、滯が普通に接しているのを見て参加し始めた。

「いくぞ、そーれ！！」

高身長 of 春樹がブロックに回ると、これまでの安易なスパイクは通用しない。女子としては高身長でも春樹相手では難しい。彼は目いっぱい腕を伸ばせる状態であり、直美のスパイクも何度となく弾いた。

「お、さっすが男子だねえ……。直美さんのスパイクが全然通用しないよ」

直美はあまり悔しそうになく笑顔でボールをバウンドさせる。

「石渡、遠慮すんなよ。相手は俺なんだから、ぶっ飛ばすつもりで来いよ」

「遠慮するよ。だって今日、なんかブラがずれやすくてさ」

「ぶっ！！」

「ちよっと直美！ 男子も居るんだから。貴女には慎みっていうものがないの？」

「もう、リエタンはいつも怒りっぱいんだから……」

くすくす笑う面々。中には股間を抑える子も居たが、すぐに練習再開。

普段できない高難易度のブロックをくぐる練習に女子バレー部員達は真剣になり始めていた……。

「よし、そんじゃ今日はここまでか……。俺達で片付けしとくから、遠藤は鍵返してきてくれよ」

「アタシも手伝うし」

「そ？ じゃあ直美、行くわよ」

「え？ 手伝わなくていいの？」

「力仕事は男子の仕事。それに職員室に用があるの」

「ふーん。そ。じゃああとお願いね。ばいびー」

直美は汗を腕で拭くと鍵を受け取り理恵に続く。

「ふー、汗かいちゃった……」

麻帆はタオルで汗を拭い体操着の首回りを引っ張っていた。

メンバーが少ないこともあってローテーションが早く普段より練習量が多く、そのせいもあって汗びっしょり。転がって行ったボールを拾い前かがみになり、転がし返す。すると雄太はあたふたして転んでしまう。

「もう、だらしないなあ」

雄太のどんくささに呆れつつ、麻帆は転んだ彼の腕を引っ張り起こす。

「ごめんごめん……」

「気を付けてね」
「おい、ネット畳んでくれ」
「はい」
ネットを整えながら拾い上げるも疲れからか作業が滞る。
「んしょと……」
前かがみの作業をする中、周りの音が静かな気がする。
「どうしたの？ 皆」
「あ、いや……」
手の止まっていた春樹は慌てて支柱を外し、急ぎ走っていく。
「変なの……」
麻帆は首を傾げつつ、ネットを抱えてそれに続いた……。

片付けを終えた面々は体育館を後にした。鍵は最期の見回りの時に掛けられるのでそのままにする。

麻帆は靴を履くと、漣と一緒に帰ろうとするもなぜかとどまっていた。
「漣？ どうしたの？」
「うん、ちょっとね。なんか忘れ物したかもしれない」
「そう。じゃあ取りに戻らないと……」
靴を脱ごうとしたところで漣が慌てて止める。
「大丈夫だよ。高尾が手伝ってくれるから」
「え？ 俺？」
「うん、ほら、行こう。マホチンは先に帰っててね」
「お、おい……」
「あ、ちょっと漣？」
麻帆は首を傾げつつ、去っていく級友を見送った……。

十

「なんだよ、忘れ物って」
てっきり体育館に戻るのかと思ったら連れていかれた先は近くの教室。漣は不満をあらわにしており、じっと睨んでくる。
「さっき、麻帆ちゃんの胸見てたでしょ」
何事かと思っていたらそんなこと。春樹は頬を掻きつつ、確かに見ていたことを思い出す。ただ、それがどうして彼女を怒らせたのかは予想ができない。
「まあ、なんだ。ちょっと気になってさ……。仕方ないじゃん。男なんだし」

「スケベ。そんなんだからちっちゃんに許してもらえないんだよ？」

「な、それとは別じゃん」

「女の子のことスケベな目で見てるのがダメじゃん。反省しないといつまでたっても許してもらえないよ？」

前かがみで作業する麻帆。首の口からかうじて見える内側。ブラジャーをしていないせいで微かな膨らみが覗けてしまい、あと少しで乳首が見えそうだった。

真面目な麻帆のおっぱいは以前見たけれど、また改めて見たいし、覗き見するという行為自体に興奮させられる。

結局はスケベ心を隠せないわけで、それは確かに普段の態度に出ているのだろう。そこを千夏が感じ取って不審を抱くのも仕方が無いのかもしれない。

「言うとおりのだ。反省します」

がっくり項垂れる春樹に滯はほっと一息。

「ったく、えっちなんだから……」

「仕方ないだろ？ 女の子見てるとむらむらするんだよ。お前らその、チビだけど最近はなんか女っぽいし、カワイイなって思ってる……さ」

「え！？」

滯相手なので正直な気持ちを溢すと彼女は意外にも声を上げる。

「なんだよ、脅かすなよ」

「だって、そりゃあその……照れるっていうか」

可愛い、女っぽい。それに自分も含まれていると思ってるのだろう。

個室での乳繰り合いでは彼女と気持ちの良い事をしていたものの、麻帆に対する性的な気持ちと比べると滯はまだまだ未成熟。彼女を頼りにしているのは事実だけれど、普通の友達という感覚で女の子を意識していると聞かれたら灰色なところだ。

「すまん。こういうのがいけないんだな。控える」

とはいえ、変に否定したら滯が機嫌を悪くする。春樹はとりあえずの反省を見せる。

「ね、やっぱり我慢するのって辛い？」

「え？ ああ、ええと……」

我慢するとなれば辛い。というかもったいない。クラスメートの日々成長を見せる身体付き。その隙間を覗くことができないのは酷く惜しい気がする。特に射精の快感を覚えてからはそれが顕著になった気がする。

麻帆の膨らみ始めのおっぱいと小さな乳首。色は薄くて彼女らしい健気さが見える控えめなおっぱい。もし許されるならまた例の条件で試合をして、慎ましい揺れを見せる麻帆を見ていたい。

「ふーん。そっか……。しようがないよね……。男の子って射精しないと大変っぽいし……。それでちっちゃんと仲直りできないんじゃないや困るもんね……」

「そうなんだよ。萩はやっぱ怒ってるもんね……」

千夏の怒り具合は当然だろう。半分は隆二のせいなのだろうけれど、やはり原因を作ったのは自分。変な話だが、途中で真一を呼んで邪魔してくれた徹には感謝していた。

「だから、えと、すつきり？　しておいた方が普通に話せるかな〜って思うんだけど？　あたし、手伝ってあげよっか？」

「ああ、手伝ってくれてありがたいよ」

澤が仲良くしてくれることもありがたい。普段はチビでうるさい猿女だと思っていたけれど、とりあえず麻帆と仲直りさせてもらえただけでも感謝している。さらに今後も手伝ってくれると申し出てくれるのだから感謝で言葉が見つからなかった……。

「うわ、臭い」

だから多少の暴言もしようがない。それに今は練習の後。汗臭いのは当然……。ただ、不思議なのはやけに下半身がスースーすること。そして違和感のある刺激。

「うっ……」

身体がかくんとさせられた。反射のようか感覚。首を振り、何が起きたのか確かめようとすると、澤が居ない。いくら小さいとはいえ、見えないはずが……。

「汗とおしっこ臭いですがいい臭い。しかもなんかぬるぬるしてるの出てるよ？」

「え……あ、おい、何してるんだよ。やめるよ」

いつの間にかズボンを下げられており、半分勃起していたチンポを弄られていた。

「なに言ってるのよ。手伝って欲しいって言ったのはそっちでしょ？　春樹が女の子見てむらむらしないようにあたしが手伝ってあげるって言ったでしょ？」

「え？　え？」

「えと、これをこうして……しごといいんだよね……」

澤はまじまじとチンポを見ながら前後に抜く。

過剰な包皮が捲れる度に赤紫を伴うピンク色の亀頭が見え隠れし、軽い痛みをむず痒い快感をもたらしてくる。

「あう、な……おい、遠藤……」

「男の子のおちんちん、こうなってるんだね。こうされると気持ちいいんだ……」

澤は春樹の声が届いていないのか前後にしごき、指に我慢汁が垂れるのも気にせず、にちやねちや音を立てさせる。

「ん、……はぁ……はぁ……」

オナニーを覚えてからは毎日こなしているけれど、自分の手ですることに半ば醒めることもあった。刺激のマンネリ化から義務のような自慰になり始めた最近において、クラスメートの女の子がじっとチンポを見ながら扱いてくれるのは新鮮だった。

その動きは遅く緩いけれど、澤の指がひんやりしながらチンポの熱を吸い取り、代わりに快感を与えてくれる。

ビクンと強く勃起させられ、どろっとカウパー腺液を滲ませる。

「あ、射精した？」



「ちげーよ……。ただの我慢汁だよ。つていうか、遠藤、お前ってスケベだな……」

「スケベじゃないよーだ。高尾が今日の練習、何度も麻帆ちゃんとか直美のおっぱい見ててさー。チンポ勃起させて格好悪かったから仕方なくしてあげる。つてだけじゃん」

唇を尖らせ不満気味だけれど、目はずっとチンポに向けられている。

濡も男の子の視線は気になるのだろう。そしてチンポにも興味深々。これは春樹の自惚れかもしれないが、彼女に目が行かず、他の女子（理恵を除く）に視線が向かっていたいせいかもしれない。

「そんなことねーよ。遠藤のことだつて見てたし」

「うそばっか」

「ほんとだつて。お前のケツ、丸くて可愛いじゃん。なあ、見せろよ」

「えー、なんでよー、スケベ」

「いいじゃん。やわけーしき、ちょっと触らせてくれよ。な？ つていうか触りたいし、いいよな？」

口では嫌がるも目は拒んでいない。ようやく目線をチンポから外した彼女の瞳からはそんな好奇心が見えた。だから調子に乗ってみる。濡も自分と同じように性に興味があるのだから。

「あん、えっち……んっ」

しゃがんでいた濡を立たせ、後ろを向かせる。そのまま短パン越しにお尻を弄ると、濡は特に抵抗も見せずされるままにしていた。

しっとりとした手触り。汗でほんのり湿った短パンは濡の匂いが香り立つ。香水のような整ったものではないけれど、興味を惹くに十分なもの。

髪に鼻を近づけクンクンとならす。さすがに恥ずかしそうに頭を躲そうとするが、肩を掴んでそれをさせない。

「ん、やめてよ。そういうの恥ずかしーっしょ」

「だめだめ。遠藤は協力してくれるんだろ。俺がエッチな目にならないようにさ」

「ま、そうしないと高尾、いつまでたってもちなっちゃんと仲直りできないしー」

濡は唇を尖らせて言う。その間もお尻を触られ続け、時折身体をくねらせる。

「遠藤って身体柔らかいよなあ……」

普段から猿のように動き回る濡だけに身体は柔らかく、ハリがある。小さいながら弾力のあるお尻はずっと触っていたいが、それ以上に楽しい事を二人とも知っている。

「あ、ちよっと……。もー……」

お尻から胸元に手を回す。他の女子に比べて小さいおっぱいだからどこがそうかわからない。けれど、ぶくつと突起した乳首に触れた時にこぼれる甘い反応でわかる。今、乳首を弄っている。濡はそれを感じて甘い声を漏らしている……。

「んっ……ふう……」

服越しに乳首を弄る春樹。濡は身体をくの字に曲げるが、それは拒んでいるからではない。甘い刺激に立っていられなくなったのだろう。

「遠藤、もう感じてるのか？」

「ん、なんか自分で触るより、高尾に触られる方が感じちゃうんだってばー」

「そうなのか？　っていうか、自分で触るんだ」

「うん」

二人きりだからなのか、それともともとあけすけな性格のせいだからだろうか、彼女は自慰の時に乳首を触ることを教えてくれた。それを想像するとチンポがさらに力んでしまう。濡も身体がまだまだ成熟と言いが、それでも性欲は他の女子並にある。特に乳首を男子に触ってもらった方が気持ち良いとすら思っており、今もこうして仲直りの執り成しを理由にシテイルのだ。

「ふう……ふうん……はあはあ……」

机に手を着き、目を瞑る。甘えるように春樹にお尻を擦りつけ、もっと欲しいとおねだり。普段は猿女と馬鹿にしつつもエッチな声と仕草で迫られると気持ちも昂る。春樹は無言になり、荒い鼻息を隠しもせず、濡の身体を弄っていた。

「はあん……んっ……あん、おっぱいばかり触って……。エッチ……。麻帆ちゃんのおっぱいみてたし、やっぱり高尾っておっぱい好きなの？」

「男は皆好きなんだよ」

「ふーん……。あたしもおっぱいおつきになりたいな」

「え？」

「誤解しないでよ？ 別に高尾に触られたいってわけじゃないしー。っていうか、やっぱおっぱいポインポインのほうがかっこいいし……」

「じゃ、じゃあさ確か揉んだりして刺激したほうがおっぱいって大きくなるんだろ？ 遠藤が仲直り手伝ってくれるんだったら俺もお前のおっぱい大きくするの手伝ってやるよ」

「あ、そういって。ただ触りたいだけっしょ？」

「へへ……あたりまえじゃん」

「んっ……まあ、いいけどさ……」

背後から手を回され、されるがままにおっぱいを触られる。自分のペーストは違う刺激に濡は興奮させられていた。

「ああん……んっ……はあはあ……んっ……ねえ、たかお……なんか触り方えっちいよ。なんかあたし、すごい変な気持ち……んっ……キモチイイしさー」

「ふうん、もしかしてイキそう？」

「わかんない。かもしれない。なんか、お腹の下が熱くっつきー。んでも、なんか物足りないかも……」

「もっと強く触った方がいいのか？」

女の子を詳しく知らない春樹は感じている濡をどう扱ったものかわからず、何度も伺ってしまう。その頼りなさにため息交じりの濡。

「んもー、そういうのって男がリードするもんじゃないの？ もっとこう……さー」
優柔不断な態度に濡はむっとした声を上げる。けれど、乳首を擦られるとまたすぐに気持ちよさそうに鼻を鳴らす。

「わりいわりい……。感じてる時はもっとこう、強くして……っ」と

「あんっ！」

「ごめん、痛かった？」

「んっ、違くて……なんか、ぽーつとなつて、そのままストンって落ちちゃいそうだし……うん、そう……あー……あん……ああん……んっ！」

感じ良さそうなところを見て強くつねってみる。何度かそれを繰り返すと濡はそのまま机に突っ伏し、低く呻き身体をかくかくさせる。

「んっ、んっ……んっ、んっ……くふうん……んっ！ ……………はあはあ……」

「お、おい、遠藤……大丈夫か？」

身体を痙攣させるかのように悶える漣に何か障ったのかと慌てる春樹。そんな彼などおかまいなしに漣はしばらく大きく呼吸をすると起き上がり、涙混じりに春樹に向きなおる。

「あ、やべ……ごめん、やり過ぎたわ……」

涙を浮かべているのを見て強くし過ぎたかと慌てふためく。

「んっ……」

漣はそのまま春樹にぎゅっとしがみ付き、頬を胸元に擦りつけてくる。

「お、おい……」

「んう……んう……」

うーうー唸りながらも抱き着く彼女に悪い気がしない。むしろ女の子から好意を伝えられているような気になり気持ちがざわつく。

「んふう……えへ。なんかすぐくよかったー」

にこりと笑って春樹を見上げる漣。上気した頬、満面の笑顔と涙で潤んだ瞳。少し前から感じていたが、もしかしたら自分は漣を可愛いと思っっているのかもしれない。それはつまり好きという感覚が芽生えているのかもしれない……。

「そ、そうか。良かった。はは、なんだよ、遠藤、いったんじゃねーか……へへ、いかされてやんの……」

そのまま気持ちに流されまいと強がり、からかうつもりで続ける春樹。

「うん、いったー！ 高尾、エッチ上手なのかもねー」

漣は素直に快感を伝えていた。

「そ、そうか……」

素直な感想に春樹はそれ以上続けられない。このままこの気持ちのままだと本当に彼女を好きになりそうな気がした。

チビでおっぱいもお尻も小さい漣。笑顔は可愛いかもしれないが、時間を置いて冷静になり他の女子を眺めればやはり見劣りする。けれどこうして抱き着いて来たり、自分だけに笑顔をみせてくれたり、気持ち良かったと教えてくれること……。

少しずつ偏り始めた彼女への気持ち。そのまま流されてしまいうので、そしてその気持ちに抵抗もあり、率直に決断できない自分が居る。

「へへ……そんなじゃ次は高尾の番だよー」

漣はしゃがみ込むと我慢汁だらだらとチンポをぬちゃりと握り、ねちよねちよ音をさせながら抜く。

「うう……くう……」

「へへ、高尾のチンポは皆と同じなのにさー、たまにさきつちよから赤いの見えるね。これ触るとどうなるの？」

「あっ」

捲られた包皮、あらわになった亀頭を指で触られると刺激が強い。

「あは！ キモチイイ？ そうでしょ？ ふーん、男の子のおちんちんって変なのー」
漣は面白そうに言い、粘液塗れの指で露出した亀頭を撫でる。

「うう、あ、やべ……やめ……」

腰砕けになりながらもなんとか立つ。けれど好奇心の強い漣は亀頭を少し弄った程度で悶える彼を面白がり、弄ぶ。

「あーん、なんか臭いし……手はべとべとだし……。高尾のオチンチン、すごく気持ち良さそー……」

くすくす笑いながら亀頭を弄る。その内にぼろんと包皮が捲れあがり、全体が露出する。
「うう……」

ビクンと膨れ上がるチンポ。漣は粘液まみれの手で亀頭を包み指をぐしよぐしよ動かす。
「やべ、それやめ……うっ！ あっ……」

亀頭を複数の指でぬるぬると弄られまくった春樹。敏感な亀頭への容赦ない刺激に抑えが効かなくなるのを感じる。

「ふふーんだ。麻帆ちゃんばっか見てる罰だよーだ」

「それは……うっ、だって……あっ……あっ……うっ！」

「ほら、ほら、いっちゃえいっちゃえー！」

「やめ、ホント出る！ 出るって！」

股間に滾る射精感。身体が自分の意思を離れて勝手に快感に屈しようとしている。精子を吐きだす快感が欲しい。それに負けようとしていた。

「我慢したってむだだぞー、無駄な抵抗は止めて射精しろー」

「うっ、あ、うう……」

ぶらさがったままの陰囊に冷たい手が触れる。ころころと擦る様にされた時股間がきゅっとなった。同時にびゅっとなつて勢いよく射精。

「きゃっ！ ちょっとー、いきなり……っていうか、あたしの顔にかけないでよー！」

漣はもう少し我慢するのだろうと思っていたのか、びゅっと出た精液に対し驚いて尻餅をつく。そんな彼女にも精子は容赦なく降り注ぐ。

びゅっびゅと顔にかかる精子。漣は顔を庇うも精子の勢いは強く、指の隙間から口や頬にかかった。

「ん、んぺっ……ぺ……んもう……やーん、口にかかったじゃない……もー！」

射精が落ち着いてもまだ握ったままの漣。手も口周りも精子塗れの彼女は喉を鳴らしつつそれを手で拭う。

「やべ、スゲー気持ち良かった……。遠藤にされるとすげーキモチイイ」

「ほんと？ あたしも高尾にされたら気持ち良かったよー。お互い様だね」

「ああ……うん」

にこっと微笑む漣が天使に見える。まだアゴに頬に垂れる精子を拭う彼女。身体の相性が良いのだろうか、お互いを気持ち良くいかせられた事実には春樹は気持ちが彼女に揺らいでい



くのを感じる。

「な、なあ、遠藤、俺さ、もしかして……お前のこと……」

「あーん、なんかべとべとする……。ごめん、ちょっと手を洗って来るね」

滯は精子塗れの手と顔に困り、さっさと教室を出て行ってしまおう。

「あ、ああ……」

好きになっただかも。

そんな弱気な告白をしようにも彼女は去って行く。追いかけるべきなのかもしれないが、射精したばかりで身体がだるい。普段ならもう一回自慰ができるのに、刺激が強すぎたせいか余韻も深い。少し冷静になり始めた彼は、伝えるべき気持ちを装飾しようと鈍い頭を働かせることにした。

「ん……え？」

すると窓の外に何かが見えた。二人居る。一人は背が高い男子。もう一人は滯より少し大きい程度のチビ女。二人に見覚えがある。クラスメイトだから当然だ。どうして二人が居るのがわからない。なぜなら本来男も女に嫌われてないとおかしい立場なのだから。

「なんで大輔が萩と？　なんでだよ、なんでアイツが許されて、俺が……」

春樹はズボンを穿きなおすと急ぎ二人を追った……。

「お待たせ……って、あれ？ どこ行ったー！ 高尾のやろー、やり逃げかー！」
濤が教室に戻った時には既にもぬけの殻……。

放課後のグラウンドには生徒もまばら。旧体育館裏ともなれば人通りも無い。

生い茂った雑草は膝まであり、スネの辺りが痛痒い。なれないスカートでそんな場所を通るのはごめん被りたいが、先に行く男子に逆らうことはできそうにない。

「ちょっと、どこまで行くのよ……」

強気に声を張るも携帯一つで黙らされるのがわかっている。悔しいけれど自分は首根っこ掴まれている状態なのだ。

「慌てるなよ……」

先に行く男子、緒方大輔は旧体育館の非常口を開けると、そのまま入っていく。

「ちょっと、なに勝手に……っていうか、なんで鍵は？」

最近はまだあまり使われていない旧体育館は安全を考慮して常に施錠されているはず。それがなぜか開いている。それだけでも不思議なのだが、なぜそれを大輔が知っているのかが不思議だった。

ゴムの臭いのする体育館。多少のかび臭さが混ざり、好きになれそうにない。そしてきつとここでまた大輔の欲望に曝されるのかと思うと気が滅入る。

「こっちだ」

大輔はそんな彼女の気持ちなどお構いなしにギャラリーに上がる。

「……」

拒否の選択肢はなく、仕方なしに千夏はそれに続いた。

旧体育館のギャラリーは渡り廊下で旧校舎と繋がっている。旧校舎は今も使われている教室がいくつもあり、たまに渡り廊下を歩く子が居る。

渡り廊下の向こう側の施錠を確認すると大輔は戻って来る。

「なによ」

あくまでも強気な態度を崩さない。少しでも相手にやりにくさを与えなければそのまま慰み者にされるだけ。そんな惨めなことにならないためにも抵抗の意思を示す。

「そういきんなよ。ちょっとしたゲームだ」

「ゲーム？」

「ああ。ゲーム。もしこれにお前が勝ったらこれはお前にやるよ」

大輔は携帯電話を見せる。

「ちよ、よこしなさい！」

千夏は手を伸ばすも頭一個背が高い大輔が手を伸ばせば届くはずもない。

「ゲームに勝ったらな。でも、できなかつたら……くくく」

嫌らしく嗤う大輔は片方のポケットからピンク色の小さな球体を取り出す。

「なにそれ……」

どうせそういう道具だろう。わかっている。

「これをさ……ここに入れて……」

大輔は遠慮なく千夏の股間に手を伸ばす。

「ちよ、やめてよ、ヘンタイ！」

「くく、ヘンタイかー。ここ弄られてアンアン言ってたのになー」

「う、うるさい！」

千夏は真っ赤になりながら声を荒げる。

「どうする？ ゲームするか？ これをマンコにあてがわないと始まらないぞ？」

「……どうせやらないとまた脅すんでしょ……」

千夏はピンクの道具を受け取ると、それをパンティの中に入れる。

「見せろ」

「嫌」

「じゃあゲームは始められないな。この携帯の中身は世界中に公開されて……」

「……見せればいいんでしょ、この卑怯者」

千夏はスカートを捲し上げ、パンティにおさまったピンクの物を見せる。

「よし、それでいい。そんじゃあ、今度はっと……」

「……？ くう！」

大輔が何かを操作すると急に股間に振動が走った。急な刺激は痛みの方が強い。ぐっと腰を落とし、それに耐えるほかなく、千夏は身をかがめたまま大輔を睨む。

「これからさ、ここを誰かが通るまで……。そうだな、人通るまでに一度もイカなかったらこの携帯やるよ」

「くう……なによ、そんなこと……簡単じゃないの……」

「くく、まあガンバレ。お前がここで悶える様子はしっかり撮影しておいてやるぜ」

大輔は携帯を千夏に向けて録画を始めた。

「くう……なによ、こんなの。感じないわよ。ただ痛いだけじゃない……」

強い振動は性器を乱暴に刺激する。それは確かに痛いだけだった……が？

＋＋＋＋＋

男女対抗バレーボールの試合の日……。

千夏は雨合羽のみ羽織って大輔を追いかけた。兔に角衣服を取り返さないといけない。そう思っ

はむしる自分の方。その大輔はなぜか屋上へ逃げ込み、なぜか鍵を開けていた。袋のネズミと思っただが、それ

屋上を探そうとしたら逆に扉を閉められた。屋上に閉じ込められた。そう悟った時には既に遅い。大輔はにやついた顔で近づいてきた。手には古い携帯電話を持って……。

「服返しなさいよ！」

怒り口調で向かうも余裕な表情の大輔に引け目を感じる。彼の余裕はどこから来るのだろ

う？ もし勝手に屋上に上がったことが教員に知られたら怒られるのは大輔の方。自分は今までも衣服を取り返す為の大義名分がある。にも関わらず、彼は悠然と構えている。

「くく……」

逆に歩み寄って来る大輔に千夏の足が止まる。

「いい恰好だな、萩」

雨合羽に手を伸ばすとバチツと音を立ててはだけさせる。

「いや！」

あらわになる裸身に千夏は悲鳴を上げる。

「可愛いもんだ。さっきまでの威勢はどこいったんだ？ ま、結局女なんてそんなもん。群れて粹がつてるうちは強気だけど一人になったらこのざま。くくく」

「なによ！ そっちこそ卑怯なことばかりして！」

肌を隠しつつ睨み付ける。けれどそこに鋭さが無い。彼の手が伸びるに応じて瞳が弱気になり始める。

「やめ……やめて」

抵抗しようと手を伸ばすも大輔は気にせず雨合羽をはだけさせてくる。

おっぱいどころかお腹、股間までさらけ出す千夏は秘部を隠そうとするも腕を取られてしまふ。

「やめなさいよ！ このスケベ！ 変態！」

「お前、おっぱい小さいな。みなみや真奈に比べて全然じゃん。っていうか、沢森より小さいな」

「うるさいわね！ 放しなさい！」

「遠藤よりはあるか？ にしても小さいな。手におさまるじゃん……」

腕を放すも胸に手を伸ばす大輔。千夏は拒もうとその腕を掴むが、一回り大きい男子の力にかなうはずもない。

「やめ……なさい、やめ……てよ……」

おっぱいを直接触られた。初めて他の男に……。好きでもない卑怯者。悔しい。恥ずかしい。悲しい。けれどそれに抗えない。惨めな気持ちにさせられる。

「くく……。乳首立ってるじゃん。なに？ 触られて感じてるとか？ はは、身体はチンチクリンなのに感度だけは立派なんだな。あ、もしかして普段からオナニーして鍛えてるとか？ そうなんだろ。萩はオナニーばっかしてるんだな」

「なっ！ 誰がオナニーなんて……」

「くく、オナニーって知ってるんだな」

「うるさい！ 放せて言ってるでしょ！」

腕を掴み、爪を立てる。今にも噛みつきそうな威勢だが、乳首を強く抓まれるとだんだん辛くなる。

「いたい、いたい、やめてよ……痛いってば……そこ、そんなに強くつままないで……痛

いの……やめて、おねがい……いたってば……」

最初は強い口調だったが、ねじられると「気に気が削げる。

「痛いってば、お願い、放して！ 痛い……痛いよ、痛い……おねがい、やめて、おねがい……」

誰に助けを求めることもできず、抗うこともできない。限りなく広いはずの空も雲に覆われ、千夏自身、悔しさに涙を溢し始めていた。

「痛い！ お願い、やめて……放してよ。お願いします。痛い、痛いよお……」

すんすんと泣きだす千夏に対し、大輔は態度を改める様子もない。既に彼の腕を掴む手も離され、涙を拭うに使われているというのに……。

「お願いよ、お願いなの。痛いよ、痛い……ひっぐ、おねがい、謝るからあ……嫌だ、痛いのいやなの……ひっぐ、ひぐ」

普段の気丈な態度など乳首一つつまみ上げればこの程度。大輔は自分の優位を感じ、そろそろ放してやろうかと思っただけ……が、それはできない。

「くく、痛い？ 放してもらいたいなら、言うこと聞けよ」

「ひっぐ、うん。聞くから……おねがい……痛いのいやだよお……」

ようやく解放を期待させる言葉に千夏は鼻水を吸りながら彼を見る。

「じゃあ身体を隠すな。前を広げろ」

「そんなのできない、嫌だ……よ……。いやあ……痛い！ いたい！ ああん、わかったよ、わかったから……痛い……痛い嫌……ひっぐ……ひっぐ……」

選択権は無いとばかりに乳首を捻られる。あまりの痛みに失禁するかと思いつつ、千夏は言われるまま、雨合羽の前を広げ、足を開いた。

「くく、わかればいいんだよ」

ようやく素直になった千夏に対し、大輔は乳首を解放する。

「ひっ……」

しばらく抓まれていた乳首を見てほっとする。特にうっ血した様子も無く、キレイなピンク色のまま。そしてねじられることがこれほどまでに痛いとも知らなかった。大輔がそれを躊躇なくできるということも……。つまり、これからは大輔の……。

大輔は古い携帯を千夏に向け、撮影音を立てる。

「なにする気……」

強く聞くことなどできず、おそるおそる尋ねる千夏。意外にも大輔は素直に応じるようでは……ペラペラ話はじめた。

「見りゃわかるだろ？ 撮影すんの。千夏ちゃんの校内露出！ 変態だねえ……、まさか学校で裸になるなんて……」

「それはあんたが……」

「ん？」

「それは……だって……服、返してよ……返してください」

「くく……それダメだな。今日はお前、その恰好でいろよ。なーに、後は帰るだけなんだしへーキだろ？」

「そんな、困るよ……。こんな恰好で……」

雨合羽は普段着るものに比べて厚手のもの。山に登る時に使うようなそれは肌に張り付いたら透けるけれど、気を付ければ普通の合羽に見える。

「くく、おい、後ろ向け」

「いや……。だ、です……。お願い、もうやめてよ。いやだつてば、恥ずかしいの……。おねがいよ……」

また涙がこぼれるが大輔は目を細めるだけで反応は薄い。

「いいから後ろ。ケツ向けろ」

「……うう……。はい」

乳首をつねられすぎたら変な痕がつく。それが嫌だから仕方なくお尻を向ける。

「はい……」

壁に手を着き、もう片方の手で雨合羽を捲りあげる。

しゃがむ大輔にはお尻の穴も大切な割れ目もしっかり見られているのだろう。

性的な恥かしさもそうだけれど、排泄をする場所を見られるのは尊厳を傷つけられる事。声にならない嗚咽を漏らし、涙を溢していた。

「良い格好だな。え？ 萩よお……。普段は生意気な口叩いているくせによ。ちよつと乳首捻られたぐらいですんすん泣いてケツの穴見せて……。かぁーだせーだせー」

「……ひっぐ……。うう……」

涙も枯れ始め、鼻をすする千夏。寒さもあり、すぐにでも服を返して欲しく、へたに反抗もできない。

「ねえ、お願い。寒い……。服返してよ。せめて、前、隠していいでしょ？ 雨が辛いんだつてば……」

「ちっ、しゃーねー……。風邪引かれても困るし……」

「……！！」

ドアの向こうで声がした。

「徹！」

「んだよ、あいつまた……」

扉の向こうの徹が居る。チビだけれど大輔にだって負けじと立ち向かえる彼なら、こんな時でも……。

「徹！ 徹ー！！」

「あ、おい！」

徹の気を引こうと声を上げる千夏。もし彼女が破れかぶれで徹を呼んだら立場が悪くなるのは大輔の方。

「ちくしょう、いい恰好しーの正義マンめ！」

「大人しくしなさいよね。そうね、その携帯、こっちに渡したら許してあげる」

一転、強気になる千夏に対し、大輔は歯ぎしりをする。一応、屋上には入れないようにされているはずだが、今ここに自分と千夏が居ることがばれることが良くない。

さらに真一を呼ばれたらどうして屋上に入れたのかについて告げる必要がある。

その時、自分だけで泥を被ることができるのか？　そして、携帯の出どころを尋ねられたら？

このご時世、スマホならともかく古いガラケーを新規に与えられる生徒が居るのだろうか？　当然調べられるだろう。そうなれば本来の持ち主こそ確実に追及される。

それ自体はどうでも良い。だが、破れかぶれになった本来の持ち主が自分を見逃してくれるだろうか？　固い職業の父は息子である大輔の不祥事ですら失墜しかねない。

この村で良い暮らしができるのは父の立場があつてこそ。それを理解できる分、吉川家の次男坊のようなこともできない。そこまでバカではないと自覚している大輔だからこそ、不祥事に弱かった。

「どうする……」

「早く返しなさいよ……。あと服も……。ほら、早く」

「……」

勝ち誇る千夏だが、何か違和感。

「お前……、もしかしてさ……」

何か突破口は無いだろうか？　どんなにくだらない事でも良い。とにかく、千夏を今、少しの間だけ言うことをきかせる方法は……。

「高杉の事、好きだろ」

「え？　は？　なにいつてるのよ！　バカじゃない！　なんであたしがあんなチビ！」

「だってさ、徹が今日来た時、お前なんかテンション上がってたじゃん。それに、前の試合の時も徹と二人で居たんだから？　それってさ、そういうことじゃん」

「はー！？　バカじゃない！　だからなんなのよ。さっさと服返しなさいよ！」

「……」

どうやら正解の様子。大輔は服を掴むとそのままフェンスの上から投げ捨てる。

「ちよ、なにしてるのよ！」

「くく……」

大輔は慌てる千夏の腕を取る。そして雨合羽を剥ぐと、唇を肩や胸、太腿に着け、思い切り吸う。

「ちよ、ヘンタイ！　痛いってば！　やめなさいよ！」

遠慮なく頭を叩く千夏だが、大輔は構わずに彼女の肌を吸う。

「痛いっての！」

急に吸われたことで痛みに驚く。一体何を考えているのかと思いつつ、ようやく身体が離れる。

「へへ、良い格好だな」

「何が？ ……………え……………」

千夏は言われて身体を見るといくつかの痕が見えた。赤くうつ血した痕は最初何が原因かわからなかった。

「なにこれ……………なにしたの？」

「キスマークだよ。へへ、お前にはまだ早いかな？」

「ば、ばかじゃない？ これがどうしたってのよ……………」

言いかけて震える。寒さのせいではない。

「それをさ、徹が見たらどう思うかな？」

「それは……………そんなこと……………徹はバカだし……………きっと……………」

「じゃあ教えてやるよ。俺がキスした痕だってな」

「な……………どういふつもり……………よ」

「簡単な話だろ？ 徹の前で裸晒して、キスマークまで見せて……………」

「……………そんな、そんなこと……………卑怯よ……………あんた、最低……………」

「取引だよ。俺が居ることを誤魔化してくれたら俺も今日は黙って身を引く。だが、もしお前が徹を頼るのなら、その時はカップを剥ぐ。徹の前でな」

「……………別に、徹はそんなこと……………気付くような奴じゃないし……………」

「そうか？ あいつも結構目ざといしな。それに、裸で何してたんだって話じゃん？ キスマークつけて……………な？ 今は意味が分からなくてもいつかきつとわかる時がくるじゃん？ アイツだってそういうの知る時が来るんだからな。そんなときにお前っていう選択肢があると思うのか？」

「……………」

「千夏？ いるのか？」

「……………！」

「どうする？ 選べよ」

「おーい、ちなつー！」

「……………わかったわよ。そっちに隠れてなさい」

悔しさや惨めさよりも守りたい気持ち。好きな人には知られたくない。嫌われたくない。気持ちを同情で染めたくないから、だからそれを選ぶことにした……………。

大輔が約束を守るとは思えない。だが拒むこともできない。

千夏は不服そうに大輔を睨みながら、早く誰かが通らないか待っていた。

股間の振動は最初こそ強弱を間違えたのか痛みだけの苦痛だったが、最弱にされたので立つだけならできる。

ヴー、ヴーと耳障りな音を立てながら振動するピンクのモノ。ピンクローターと言われたが、どうしてそんなものを大輔が持っているのかは不明だった。

特に不思議に思ったのが携帯電話。彼の家はそこそ大きく、父も固い職業の人。いわゆる名士の家系なので息子である大輔が携帯機器を持たされてもおかしくない。ただ、それならそれで自慢の出来そうなスマホの新しい機種を欲しがるのではないだろうか？

村には携帯ショップが無く、隣町まで行く必要があるが、今はどこもかしこもスマホの新規キャンペーンばかり。自慢好きで大輔が旧型の携帯を欲しがるとも思えず、かといって彼の父がわざわざ古い機種を探し当てるとも思えない。存在自体が不思議だった。

「ふん……こんなことして、バカじゃない？ 何がイクよ。こんな外で、しかも大っ嫌いなあんたが居るところでそんな気持ちになるわけじゃないでしょーが」

千夏はぶちぶち文句を言うが、大輔は薄ら笑いをするだけだった。

「あ……」

千夏はしゃがみ、渡り廊下のフェンスに隠れてから隙間で下を除く。

人が来た。誰かはわからないが、ボールを追っている。ミスキックでここまで来たのだろう。なんであれ一人は一人。ありがたい。

「……ちっ」

予想外に早い一人目に大輔は舌打ちしていた。

「ふふん。どうやらこの勝負、あんたが思ってたより簡単みたいね？」

「どうせその内、足腰立たなくなるぐらいよがるくせに」

「どうかしら？ あんたの顔見てたらそんな気も起きないわよ」

千夏は侮蔑の視線を投げつつ、新たに誰か来ないか口笛を吹いて待っていた……。

その日、睦美は委員会の仕事で視聴覚室に居た。

連絡事項を書き留めた後、明日の配布・連絡事項を隆に報告しに行こうと部屋を出ると、腕で顔を拭っているまさるを見つけた。

「まさる、どうしたの？」

「ひっぐ、おねえちゃん、ぼく、上靴盗られた……」

「盗られたって……、また？」

無言で頷くまさるに睦美は目をぎゅゅとつぶる。

今季始まってこれで三回目。いずれもゴミ捨て場、焼却炉などに捨ててあったのを見つけてくるのだが、裂かれていたり、靴底に油をべっとり染みこませていたりと使えないようにされていた。

弟への度のこしたイジメについては以前弟の担任に相談をしていた。けれど弟にしっかりとささい、やられたらやり返せと発破をかけるだけでいじめっ子たちを注意してくれない。親に相談してもお姉ちゃんなのだからと丸投げされ、最近では靴のお金も渋るようになってる。

貴方の子なんだから貴方達が責任を取れと言いたかった。余計な行事のせいで無計画に家族を増やしてくれる両親が憎たらしい。そんな気持ちが増えれば弟に対しても苛立ちも募るばかりだった。

「もう、しつかりなさい。泣かないの！ まさる。そうやって泣いてばかりだから相手がつけあがるのよ。たまには一矢報いるつもりでぶんなぐってやりなさいよ！」

「だって、僕……喧嘩はダメだって、先生に……言われたもん」

——先生の言うことをよく聞きなさい。

まるで呪いのような言葉だ。その結果がこれなら聞き流しなさいと言いたくなる。

「だってじゃないの！ そんなんじゃないよ！ まだたつてもイジメられつばなしよ！ しゃきつとなさい！ 男でしょ！」

「ひっぐ……だって……」

頼りにしている姉にまで怒られ、まさるはどうして良いのかわからず大泣きし始める。

「あーもう……ほら、泣かないの……」

「あらら、イインチョ、どったの？ なんかすごい声だったけど……」

「高嶋さんらしくないわね。そんな大きな声出して……」

すると声を聞きつけたのか石渡直美と高峰理恵がやって来る。

「なんでもないわ。弟のことであつと……」

「っていうか、なんで弟君、裸足なの？」

「それの上履きどころか靴下まで……。それに擦り傷……」

「ほら、行くわよ。まさる」

「ちよつと待ちなさいよ。どこに行くのか知らないけど、まず保健室に行かないと。裸足

で歩いてたら怪我するわ」

遮るように立ちほだかる理恵に内心イラッとさせられる。彼女なりの正義感なのだろうけれど、それならまさるが虐められる前に発揮してもらいたい。

「ささ、保健室行こうね。まだ井沢先生いるよねー」

能天気な直美にも腹が立つ。

義務も果たさずに権利ばかり受ける卑怯な人達に腹が立つ……。

「ん……んふう〜ふう〜」

余裕を見せるための鼻歌が少しくぐもる。テンポがずれた気がする。フェンスによっかかると、顔はうつ伏せ気味。

どうも股間がむず痒い。汗でもかいたのだろうか、パンティが変に湿っている。

「お、どうした？ 感じ始めたんじゃないか？」

「は？ なに言ってるわけ？ こんなおもちやで感じるとか……あり、えないし……」
強がる千夏だが顔は先ほどより桜色が濃くなっている。

どうしてだろう。たかが振動するだけなのに？ 股間を無機質に刺激されているだけなのだから、普通に痛がるべきなのに？ それがだんだんと……。

「別に平気だし？ っていうか、五人ぐらいすぐだし？ なんなら十人だって平気よ」
強がる声が裏返る。そのことを気付かれ、また顔を赤くさせられる。

「くく、そんなに余裕なら十人にしようぜ。ま、二人目すらまだなのにな？」

軽口のつもりが大輔はそのまま受け止める。吐いておいて取り消すこともできず、千夏は苦々し気に大輔を見る。

「んっ……ふう……」

まだ痛みがある。若干。

股間が熱い。何か滲み出た。おしっこを漏らすような感じで割れ目がぬかるんでいく。

「お、良かったな。二人目が来たぞ？」

今度は女子。何か荷物を持っていた。となれば、戻る時にもう一度通るかもしれない。二重カウントの是非は決めていないが、ごねるの也需要。

「ふう……ふう……ふう、このままあと3人ね」

「なに言ってるんだよ。あと7人だ。お前が言ったんだから責任持てよ」

「そんなの狡いわ。後からルール変更なんて卑怯よ」

「お前が十人だって平気って言ったんだろ？ それとも無理か？ ま、無理なら無理でもいいぜ。その代り、十人は無理でした。許してくださいって言ってパンツよこせ」

「嫌よ！ 誰が、そんなこと……！」

股間の刺激が緩くなった。けれど、弱くなると痛みが薄れ、振動がちやうど良くなってしまふ。

「んっ……んうー……はあ……んっ……」

変に溢れる唾液を飲み、少しでも振動を抑えようと太腿を閉じる。何かを強く掴んでいた方が気も楽と、ズボンをしっかり握る。

「くく……良い感じだな」

背を向けたせいで大輔からはパンティが丸見えになっていた。

股間は若干色のにじみが見える。それは暗がりから起きるグラデーションではなく、明らかな染みが原因……。

「はい、これでよしつと。他にどこか痛いところはあるかい？」

「……」

首を振るまざるに元治はうんうんと頷く。

「ええと、予備の靴下とサンダルがあるから、今はそれを使うといいよ」

「ありがとうございます。井沢先生。ほら、まさる」

「ありがとうございます」

睦美に促されまざるは彼の目を見ずに頭を下げる。

「……うん」

その様子を見ながらペンを走らせる元治。診察の前に彼は険しい目をしており、消毒の最中もまざるのクラスを聞きだしていた。

「高島さん、先生への連絡は……」

睦美は無言で首を振る。

「そうか……。うーん、困ったもんだ」

元治はため息をつき、別のファイルを取り出し、まさるの担任の名前を読む。

「一旦僕の方からも話をしておく。こういうのはどんどんエスカレートしていくからね。最初の時点で力になれていたら良かったんだけど……。ねえ、まさるくん、もし、今日みたいなことがあったらさ、僕のところに来てくれないか？」

「保健室に？」

「うん。保健室の先生だつてちゃんと教員免許を持つてるんだよ。大学時代は家庭教師から塾の先生、後輩の試験指導なんかもしてた」

「それが何の関係がありますか？」

突拍子の無い言葉に理恵は首をかしげて尋ねる。

「つまり、ここでも勉強を教えることができる。だから、もし教室の通うのが大変だったら保健室で授業をすることができるんだ」

「ほんと！」

元治の意外な言葉にまさるは顔を上げ、目を輝かせる。

「ああ。体育以外なんでもできるよ」

「そんなのダメです！」

「え……それは、どうして？」

ほぼまとまりかけていた話の流れを睦美の声が切る。一同驚いた様子で彼女を見ていた。

「だって、一度逃げ癖がついたらまさるは……。井沢先生、靴下とスリッパのことは適者しますけれど、そうやって弟を甘やかさないうでください。この子はいつもそうやって他人を頼ることばかりして、だから虐められてもやられる一方で……」

「高嶋さん、それは言い過ぎじゃないかしら？ 保健室登校というのは一つの洗濯ですし、教室でイジメを受けて、そのままというのは弟さんも辛いわかりだと思えますわ。それに、

いつでもあなたが助けてあげられるわけじゃないのだし、ここは井沢先生の言うとおりにしたほうが……」

「そーだよー。なんでももらえるものはもらって、利用できるものはした方がいいよ。立ってる息子は扱って使えって言うでしょ？ っていたー！」

「立ってる物は親でも使え。全然違うじゃない。まったく、直美は……」

「こほん……。ええと、僕は養護教諭としてまさる君をこのままにしておくのが良くないと判断しているんだ。だから、保健室登校も一つの手段だと思っし、道を示すのは僕のような大人のやるべきことなんだ。それは決して逃げ癖をつけるためじゃなくって」

「何が利用できるものは、よ！ そうやって他人にたかって生きるの？ 誰かにおんぶにだっこで生きるなんて物乞いみたいじゃない。というか物乞いよ。権利だけ主張して義務は果たさない。そのクセ他人のやることに文句つけて！ 私がまさるをイジメられて辛いけどでも思う？ 弟が惨めな思いをさせられて、その尻ぬぐいをさせられて、何かにつけて押し付けられて！ 今更になって利用しろ？ 誰が何をしてくれるっていうのよ！」

睦美はわなわなと手を震わせ、誰を睨むでもなく力んだ表情で歯をかちかち言わせていた。

「お、おちつきなよー、イインチョ、そんな風にしたら弟君も驚くよー」

「何がイインチョよ。調子ばかり良くってさ、今日も高峰さんのご機嫌取り？ そうよね。利用できるものを利用するんだもん。娘さんと仲良くしてあげればお父さんの気分も良くなるでしょうね。貴女達はお似合いよ。権利を振りかざすものとおこぼれ拾うんだもん。私はそんな惨めなこと嫌。まさるをそんな弱虫になんてしたくないの！」

「高島さん、そんな言い方はよくないわ。直美に謝りなさい。それに父を侮辱しないで欲しいわ」

「皆知ってることじゃない。今更言われて何が悔しいわけ？ 貴女のお父さんが可哀想な母子家庭に保護を与えて人並みの暮らしをさせてあげてるだけでしょ？ いい気分よね？ そうやって他人の力を使って自分の手柄みたいに誇れるんだもん」

「高島君、そういう言い方は……」

「ふん。そうやってなれ合っていればいいじゃない。まさる、行くわよ」

「あ、おねえちゃん……」

腕を引っ張られて無理やり立たされるまさるは三人に向けて軽く頭を下げる。そんな様子も睦美は苛立つらしく、強引に引っ張り保健室を出て行った。

「……あら、イインチョ、ご機嫌ななめってレベルじゃないね。ありや断崖絶壁だよ。急カーブしてるくせにね……って、あれ？ おーい、りえたーん？」

安易な下ネタも理恵は俯いたままだった。いつもの高飛車な表情ではなく、目線を下げた少し寂しそうな、そんな瞳。

「やだなー、リエタン。アタシは別にそんなつもりじゃないよ？ っていうか、リエタンのお父さんが許可してるわけじゃないじゃん。ただ、ちゃんとルール通りにしたらもらえたっただけっしょ？ そりゃ感謝するよー。これまでは嘘つかれてもらえなかったんだもんね。」

なはは……………」

「そうよ。貴女が私に感謝する必要なんて無いわ……。だから、もし、私が嫌なら無理に付き合わなくていいわ」

「ちよっとー、そんなふうにおもわんといてー。あたしは何も下心があつてリエタンと仲良くしてるわけじゃないんだよー」

「…………ええ……。貴女は誰とでもうちとけられるもの……。私じゃなくても……」

「んでもー、イインチョには嫌われてたっほいね。ちよいショックー」

「…………ごめんなさいね。なんか私まで貴方を責める感じになつて……」

「え、そんなことないよ。全然…………ね、変なこと言わないでさー」

「…………ただの我儘よ。今日は一人で帰るから……」

「…………ちよっと、理恵……」

「…………」

とぼとぼと保健室を出る理恵を直美は追えなかった。泣いているわけではない。ただ、一人になりたい時ぐらい彼女にもあるのだろう。そのまま一人にして良いのかわからないけれど、一緒に居るべきは自分だと不都合があるような気がする。何を言ったところで今の彼女はきつと……。

「ふう……、申し訳ないね。それでも児童心理学を学んだはずなんだけど……」

元治は何一つ言葉を挟むことができないことにながっくり頭を下げる。

「そんなことないよ。先生は悪くないっしょ。っていうか、高島の奴、理恵をイジメるなんて許せない」

「石渡さん、喧嘩はよくないよ……」

「そう思う人はそう思えばいいよ。アタシはそう思わないし」

自分の言葉がいつになく空虚に思えたのか、元治はしばし黙ったままだった。



ブーン、ブブ……………ブーン、ブブ……………ブーン、ブーン……。
緩急を告げる振動音。

「んっ……………はう……………ふうん……………やん……………なにこれえ……………んっ……………はあはあ……………」
内股で身体をフに曲げる千夏はフェンスにかるうじて掴まることで立っていられた。
緩い振動からの刺激に身体が熱くなると痛みが消え、代わりに快感が芽生えた。

「んふう……………んふう……………はあはあ……………っ！くうん……………」
犬の様に鼻を鳴らし、歯を食いしばるも緩急をつけた刺激にすぐに半開き。溢れる涎が唇を濡らし、股間もまた湿り気を強めていた。

「おうおう、良い感じになってるじゃん。うわ、すげえ濡れてるし、女の臭いがぶんぶんするぞ。くせえくせえ……………」

大輔はスカートを捲ると、濡れ湿ったパンティを見てくくっつと嗤う。

恥ずかしいが抵抗する余裕の無い千夏はパンティを見られつつ、ただ悶えていた。

「んっ……………んっ……………はあん……………はあんっ！くう！んっ！」



少し前から自慰を覚えてしまった千夏は夜、寝る前に軽く指で擦っていた。それは性的好奇心をくすぐる程度のやんわりとした刺激どまり。脇の裏にはチビで生意気だけれど、いざという時は頼りになる彼を思い浮かべて……。

そんな幼い刺激とは違う、強引で容赦のない振動の繰り返し。振動をぐいぐい伝えてきて、無理やり気持ち良くさせてくる。

最初は我慢して堪えたけれど、緩急を加えられ、急に強くなり、しばらくそれを続けられたとき、視界が真っ白になった。

声こそ我慢できたけれど身体に力が入らず、フェンスに寄りかかり立つのがやっと。しばらく身体が甘い刺激に震え、思うように動けなかった。

涙がこぼれ、息が荒くなる。まるで100メートル走を全力でこなした後のような疲労感。これがイクという感覚なら、自分の身体は女の子の快感を知っているということ。そして、大輔のような卑怯者にそれを見られてしまった……。

「どうだ？ 萩、イッた？」

「……い、イッてない……イクわけではない……」

気付かれていないなら嘘をつく。だが、尋常でないことはしっかり伝わっている。

早く三人目が来て欲しいのに誰も来ない。いくら旧校舎であっても用務員や教員が訪れるはずなのに……。

「まだ三人目来ないなく、萩。どうだ？ あと八人も我慢できるのか？ ん？」

「へ、平気よ……これぐらい……わけない……わ」

「くく……、ここをこんなに濡らしてなあ……。お前処女？」

ぬるっと濡れたパンティをぴとりと触られる。

「ひう！ ちょ、触らないで、ヘンタイ！」

「くく、こんなに濡らしてて触ってやらないなんて可哀想じゃん。っていうか切ないだろ？ イキたいだろ？」

「誰が……。少なくともあんたにはごめんだわ……。だれが、あんたなんかの……んっ、やめてよ。さわら……ない……で……」

パンティのクロッチ部分を中指と薬指でゆっくり何度も撫でる。乳首を強く抓む様な乱暴な行為と違い、千夏の反応を確かめるようなゆっくりとした愛撫。

「ふうん……はあん……ああん……やめ、触らないで……こんな卑怯よ……ずるいわ……んっ！ ああん！」

甘い声が漏れ始める。普段から生意気で男子相手に口をとがらせては暴言を吐く千夏が、今は女の子の部分をしっとり濡らして撫でられると快感にとろけた声を出してしまう

酸っぱさを含むむっとした臭いが漂い始める。それは吹き曝しの渡り廊下ではすぐに消えるが、大輔は十分な手応えを感じていた。

「んっ……はあはあ……んう……ああん……はやくう……だれかきてよお……」
割れ目をなぞる指先の刺激は甘い快感をくれる。だが、布地の反発がそれに抵抗し、イクには至らない。

イケないまま煽られ続けると切なさが募る。もし大輔がいなければ自分でぐいぐい割れ目を弄って思う存分イケるのに。

「はあん……だめえ……、ああん……くふうん……」

フェンスに指を立て必死で喘ぐ。声を出すことで少しは気がまぎれるのか、それとも気持ちを高ぶらせてしまうのか、ただただ我慢できないだけなのか……。

千夏の思考はぐるぐる回るばかりで答えが出そうにない。

「なあ、どうする？ このまま8人待つか？」

「……んっ……え？ なによ……待てるわけ……ないじゃない……」

「ふふ、じゃあこうしようぜ。どうせこのままじゃお前がイッて終わりなだけだ。張り合えないし、ゲームにならねーよ。だから特別に減らしてやる」

「なによ、増やしておいて、そんなの信じられないわ」

「俺はどっちでもいいぞ？ まあ、聞いてから判断しろよ。今、ここでお前がパンツ脱いで俺に渡したら二人減らしてやる。パンツーだけに二人だ」

「しょーもな……ばっかじゃない？ おやじギャグとか寒いし」

「なんとも言え。どうする？ パンツ脱ぐか？」

「誰が……そんなこと……んう……」

既に何度かイッテいる。それは大輔も見抜いている。腰をカクつかせて声を上げていて、彼が気付かないはずがない。それでもゲームを止めずに弄ぶのだ。パンツを預けたところであと一人になればイクところを指摘されて結局携帯は奪えない。ならば脱ぐ理由が無い。額くつもりも無かった。

「……お姉ちゃん……」

「……ほら、行くよ、まさる……」

二人が通った。

「ちっ、委員長かよ」

二人はフェンスに隠れ、睦美とまさるから身を隠す。

「んっ……あと六人ね……」

睦美は辺りをちらちら見ている。それは弟も一緒。何か探しているのだろう。そのまま素通りして旧校舎の方へ向かうが、もしかしたらまた戻ってくるかもしれない。

「ね、ねえ……、ここを通った人を数えるのよね。重複はあり？」

「ん？ 同じ奴か？ それは無しだろ。うるうるされたらそれで終わりじゃん」

「でも、一旦通り抜けた後なら……。ちゃんとルール決めてないんだし、そっちが後付で増やしたんだから、少しぐらい譲歩してよね」

「しゃーない。一旦通過して居なくなったらんならもっかいカウントしてやるよ」

「んっ……ほんと？ それなら……んっ……」

「おい？ どうした……」

千夏は内股のままよろよろ立ち上がると腰に手を当てる。そしてゆっくり足を上げ、パンティを脱ぎ始める。

「これで……あと4人よ……」

クロッチが濡れたパンティを差し出す千夏に大輔はにやりと嗤う。パンティを受け取ると用意していたビニールに入れていた。

「用意してたの？ キモいわね……」

脱ぐことも想定していたのか準備万端な大輔に嫌悪感が強くなる。彼は淫らな汁で汚れた布を一体なにに使うつもりなのか……。

「あと……六人だな」

「んふ……残念……あと四人よ……」

内腿に汁を滴らせながら、千夏はほくそ笑む。

下では何かを見つけた睦美が弟を急きたてて通過するのが見えた。

「ちっ……」

約束の通り、あと四人。携帯を奪い返せるかと言えば無理だろうけれど、この茶番をいつまでも続けるぐらいなら短縮したほうが良い。千夏はそう考えた。

「まあいいさ。あと四人。最初に戻っただけだ。全然問題ねーな……」

強がりだろうか、大輔はつまらなそうに言う。千夏に後ろを向かせる。

「ちょっと……」

「くく……どれどれ……」

大輔は再び千夏のスカートの中に手を入れると、何も守ってくれない大切な場所に指を伸ばす。

「いや、やめてよ！ そんなとこ触らないで……あつ！ んっ！」

ぬるぬると愛液混じりの割れ目に大輔の指が触れる。今度は布地などなく、直接指がにゅりゅと侵入してきて……。

「くうん！ だ、やめて……よ……んっ……あつ！ んっ！」

下腹部が苦しくなる感じ。身体が強張り、大輔の指を拒もうとしている。けれど十分に解された下腹部は大した抵抗もできずに指を飲み込んでいく。

「ああん……んうんふう……うん！ んっ！ んっ！ ……んう……ああん……」

指がゆっくり千夏の割れ目に入り込むと、彼女の反応を確かめながらゆっくり前後した。

「んうふうん……ああん……やめてえ……そんなふうに……いやだあ……ああん！」

気持ち悪い。好きでも無い、それどころか嫌いな相手に大切な場所を弄られること。けれど、ゆっくりとした振動と相成って身体は気持ちと裏腹に快感に変わる。

「んっ、んっ……ああん……はあん……だめ、さわらないで……いれちゃいや……ん！」

ぬちゅぬちゅ音をさせながら割れ目を弄られる。

下腹部が熱くなり、奥から奥から愛液が滲み出て、内腿をべたべたと汚していく。

「あはあん……おねがい、触るのなし……だめ……んっ！」

「なんでだよ？ いいじゃん。これぐらい？ 痛いとか？ 痛いならもつと優しく触ってやるぞ？ ん？」

「ああん！ やだあん……だめ……だめえ……」

優しくゆっくりと陰唇の内側をなぞられると快感しか得られない。足ががくがく震えだし、そろそろ立てなくなるところで千夏は大輔にもたれかかる。

「だめ……おねがい、もうしちやいやだあ……おねがい、んっ！ ああん……ねえ、おねがい……もうさわっちゃいや……さわらないで……ねえ……ああん！」

彼を上目遣いに見上げ、必死にお願いする千夏。小さいながらも胸元が覗け、乳首がぷつと勃起しているのがわかる。

「へへ……なんだよ。気持ちいいんだろ？ なあ……」

服越しに乳首を探り、突起したところを指で挟む。

「んっ！ ああん……だめ、やめ……あつ、あつ、あつ……」

また抓まれると思うも今日は軽く抓んで擦るばかり。それは身体中にじわーっと温かい感覚を与え、ゆったりと弛緩させてくる。

とうとう立てなくなった千夏は大輔にしがみ付き、身体を預ける。

「はぁん……はぁん……おねがい……ゆるして……おねがい……」

「気持ちいいのか？ なあ、そうなんだろ？ 答えろよ」

「……んっ……うん」

これ以上誤魔化しきれず、頷く千夏。大輔はそんな彼女を支えつつ、裾から手を入れ、おっぱいを直接触り始める。

「んっ、だめ……いやん……あっ……あっ……あっ……あっ……はぁ、あっ……」

おっぱいをゆっくり弄られると千夏は過呼吸かのように短い言葉を繰り返す。肩を震わせ、足をふらつかせて快感に悶えると、大輔がそれをがっちり支える。不覚にも彼に身体を預け、されるがままに快感に目を閉じていた。

「くく、どうだ？ 気持ちいいんだろ？ なあ……」

「うん……気持ちいい……いいの……」

「ったく、最初からそう素直にしとけばいいんだよ……。で？ 何回イッタ？」

「んっ……わかんない……わかんないよ……もう……」

「んだよ、全然勝負になんねーじゃん……。仕方ないな。こうしようぜ。あと四回イクまでに四人通らなかつたらお前の負けな」

「四回……イクの？ んっ……んっ……はぁん……」

軽く達した回数を含めるなら既に五回。だんだんとその間隔が早くなっているのと、大輔の悪戯も加わり、すぐにいかされる気がする。

「そんなの……むり……だつて……なんか、いま……んっ！ んっ！ あぁん！」

話している傍からイッテしまう千夏。がくがくと震えるが、大輔がしっかりと支えてくれるから倒れずにすむ。気付くと彼にしがみ付いていた。

「今、イッター？」

「……」

無言で頷くと彼は「三回な」と無慈悲に言う。

「……そんなの……ずるい……だつて、もう……無理だよお……」

涙混じりに告げる千夏だが、それは悔しさからなのか、快感からなのかわからない。

「じゃあ、もう一つ追加ルールだ。お前が俺をイカせたら回数を一回増やしてやるよ」

「イカセル？ どうやって？ だつて、そんなの……やだよ……」

男子をイカセル方法に思い至り、千夏はさらに泣きそうになる。

「落ち着けよ。別にセックスさせろとまで言つてねーだろ？ 手でもなんでもやればいいだろ。それはお前に任せるつての」

「……ほんと？ でも、どうすればいいの？」

セックスの可能性は無いと知り、ほっとする千夏。けれどその間もローターはビリビリ動き続ける。

「俺がお前にしたようにすればいいんだよ。手でいじったりさ……」

「でも、大輔だって我慢するでしょ……あたし、やり方なんてわかんないし……、この口

「ター、すごい刺激だし……手でするどころじゃないし……」

「しようがねーな……。じゃあ、お前が俺をいかせようとしてる間は止めといてやるよ。それならいいだろ」

「……………そんなの……んっ！ ああん！ んっ！ だめえ きゃん、強くしないで！ だめ、ずるい、だめだめ！ いっちゃういっちゃう！ いっちゃうってば！ わかったわよ、する、するする！ だから、おねがい、一旦タンマ！」

答えを洩る千夏に対し大輔は振動を最大にする。最初なら痛がるだけだろうけれど、十分に身体が火照った千夏にとって、強い振動はより深い快樂へ揺り落すものでしかない。

千夏は肩で息をしつつ、その場にへたり込む。

「……はあはあ……んっ……はあはあ……」

もう少し遅かったら強くイキそうだった。軽い絶頂なら隠せるかもしれないが、あのままだと恥ずかしく乱れた姿まで見られそうで怖かった。

「さてと……」

大輔はズボンを下ろすと肌より浅黒くなったチンポを千夏の前に出した。

「きゃっ、何してるのよ……いきなり……」

「なんだよ。チンポ見んの初めてか？ くく、萩はガキだな」

「な、別にこんなの……」

「お？ 見たことあるのか？ 誰のだ？」

「……別にいいでしょ……うっさいな……」

ローターの振動が途絶えて気持ち収まりつつあった千夏だが、目の前に出されたチンポに性的興味がある。

皮に隠れた赤い先っちょ。ぬらっと光る汁は生臭く、自分のにじませたモノと違う。

それが滴るところを見ると一層嫌悪感が芽生えるが、なぜか鼻をひくひくさせてしまう。そしてお腹が少し熱いのを感じる。

ぶよっとした皮に包まれたそれは醜く、以前に見た徹のと違う。徹のもお世辞にも良いとは言えないが、皮に包まれたその印象は良くない。

誰に聞いたかは忘れたが、皮に包まれたチンポはホーケーと言われ、臭くて汚い弱っちいチンポと記憶している。

大輔らしい情けないチンポ。

そう思うと少し余裕が出てくる。弱っちいチンポなら少し刺激しただけでもイクはず。そうしたら少し余裕ができるかもしれない。

「……これを……弄ればいいんでしょ……弄れば……」

おそろおそろ手を伸ばし、チンポを掴む千夏。

思ったより熱い。そしてびくんびくん震えている。ぬるっとした粘液が伝わり、手を汚す。

「ん……なにこれ、臭いし……もうやだ……」

「文句言っでないで早くやれよ……。止めるならローター動かすぞ」

「んっ、だれもやらないなんて言っていないでしょ……ったく。こんなホーケーおちんちん、すぐにいかせるし……」

意を決してチンポを前後に抜く。男の子のオナニーの仕方を詳しくは知らないが、握って前後に抜くらしい。その時、適当に性欲のはけ口の女子を妄想する。

自分が妄想になるのは嫌だが、大輔のように周りに女子の影の無い男子ならすぐにその気になるはず。どうせ女の子と手をつなぐことすらないのだろうし、こうして触られているだけでびくびくしているのが良い証拠……。

千夏はそんなことを思いながらチンポを抜く。きつと今日の勝負はオナニーの手伝いをさせるためなのだろう。それにひっかかるのは悔しいが、もし上手くいけば約束を盾に携帯を……。

「ちゃんと抜けよな……。そんなんじゃ全然いけないぞ」

「うるさいな……。こんなわかかんないわよ。ったく、さっさとイケばいいのに……」
だが、思いのほか我慢強い。

前後にぬちゅくちゅチンポを抜く。先っぽが捲れ、赤い亀頭が見え隠れし、粘液を溢しまくる。いつの間にか手が粘液塗れになっており、そこには白い筋のようなモノが混じっていた。

「ん……んっ……んもう……なんでいかないのよ……もー……」

「うん、まあ気持ちいいぞ？ 自分でやるよりずっといいぞ。ほら、頑張れよ……」
ねちやねちや卑猥な音をさせながらチンポを抜く。けれど大輔は余裕の表情。おかしい。女の子に嫌われている系男子の上位に食い込む大輔の癖に慣れているのだろうか、全然感じている様子が無い。ときおりどくくと汁が垂れるが、表情は余裕。

「んっ、どうなってるのよ……もう……んしよんしよ……んう……」

一生懸命チンポを抜く千夏だが、思った結果には至らない。その間に誰かが来るかといえど、それでもなく、ただ性器への奉仕を続ける屈辱だけが募る。

「んもう、疲れた……」
手を交代させても結果は変わらないだろう。だが、いつまでも大輔がのんきに待つはずもなく……。

「全然だな。これ以上するのは時間稼ぎなだけだし、ローターを……」

「それは……だめ、狡いよ。だって、こっちは手でしょ？ ローターは電池じゃん。手よりずっと早いし……」

「ふーん、まあ、言われてみればそうだな……。じゃあ、こっちも手でしてやるよ」

「え……あ、ちよっと！ やめ……やめてっば……！」

「へへ、そういうなよ。さっきだって良かっただろ？」

大輔は千夏を押し倒すと並んで横になり、おっぱいを揉み始める。

「んっ、ずるい……そんなのルール違反……ああん……んっ……やだあ……」

「色っぽいじゃん。その声聞いていると俺もイケそうだ。おら、チンポ抜けよ」

「そんな……だって……ああん……んっ……はあん……やだあ……」

「くく、もうイキそうじゃねーか……、おっぱい小さいくせにお前エロイんだな」

「う、うっさい。別にエロくなんか無いし……」

「ふーん。じゃ、試してやろうか？」

「え……だ、だめ、やめて……あ、ちよ、何する気よ……え……え……」

大輔は起き上がると今度は千夏と逆に寝そべり、股間に顔を近づける。咄嗟のことに身動きできない千夏の眼前にはチンポがぼてんと現れ、頬に当たる。

「んっ！ 何するのよ！ この変態！ 口に入ったらどうする気よ」

「そのまましゃぶればいいだろ？ 手でダメなら口でやれよ」

「だ、誰があんたのチンポを口で……って……あ、ちよつと……んっ、ま……あ……ん！ やだ……だめえ……」

文句を言う間に大輔は千夏の割れ目をいじくり始める。

割れ目を指で開き、ふーと息を吹きかける大輔。まだ男を知らない秘所は赤く充血したような媚肉を見せつつ、期待を秘めているのか、愛液を滴らせていた。

「へへ、萩のはどんな味かな……つと……ちゅ、ぺろ……」

「んっ！ あん！ やっ、なにしてるの！？ ちよ……んっ……ああん……やだ……なにこれ、なんかあったかいのがあたしの股に……え、ちよつと……まさか……」

「んちゅ、ぺろちゅ……ぺろじゅず……はは、しよっぱいな……。それにくせー……。萩のマンコは処女マンコだな。臭うぞ」

「なっ！ 誰が匂うのよ！ ふざけないでよ！ って……んっ……やだ、やめてよ……なめちやいや……んっ、ああん……なにこれ……うそ……え、え？ ええ……んっ！」

「ぺろぺろ……ちゅ、じゅず……ぺろ……ちゅう……」

「んっ、ああん……はあん……やん、やめ……んっ！ ああん……だめえ……んっ」

陰唇を舌でねぶられ、千夏はたえだえに喘ぐ。なんとかイクまいと力を込めると、チンポを強く握ってしまう。

「おお、やるじゃん。萩、そんなに俺のチンポが好きか？ くく……そのまましごけよ……。俺もお前のマンコなめまくってやるからよ」

「んっ！ だめえ……それ以上舐めないで……ああん……だめえ……んっ！ あん、いくいっちやうってば……おねがい、やめて……、せめてローターで……あんなんかに、いや、やめ、あ、あ、あ！ やめ！ おねがい、だめえ！ んっ！！」

膣の入り口辺りを何度も舌で虐められる。千夏はすぐに耐えられなくなり、先ほどまでの切なさも相成って達してしまう。

「ああん！ んう！ くう……ああん……だめえ……や、みないでよ……ああん……だめえ、おねがい、イッてるあいだはゆるしてえ……ああん……ああん……んっ！」

ふわっと浮く感覚に不安を煽られる。一方で快感が訪れ、身体に力が入らなくなる。

「うっ、うっ……うくう……んっ……」

しゃっくりを繰り返して、がくがくと震えだす。千夏は目をぎゅっとつぶり、手近にあったチンポをぎゅっと握りしめていた。そのまま身体を丸めようとしたりと、頬、唇に温かい棒が触れる。ぬるっとして、生臭さを漂わせるものだけれど、今は少しでも酸素を求めようと強く呼吸する。

「んふう……んふう……ふう……んっ、臭い……なによこれ……んっ……」

涙で滲む視界の中、ぐいっと押し付けられるものがある。それは滑らかな粘液ですべり、唇に触れる。

「んちゅ……んう……ん!?」

粘液で滑り、呼吸のタイミングに合わせて口の中に押し込められる。

「んふう、んっ! んちゅ……ちゅう……」

口の中に押し込められた熱い棒。生臭くしょっぱい、苦味のある汁を滲ませながら口の中でときおりびくと震える。

「んちゅ……んっう……んっ! んちゅ……、なに……これ……んちゅ……くさいし、熱いし……」

口の中で上下に振れる熱い棒。舌に触れるとどろっと粘液を溢し、唾液と混ぜて喉の奥へと押し込まれる。

「んごく……んぐ……げほげほ……んげほ」

喉に粘つく汁を飲みこみ、かるくえずく。熱い棒を吐きだすと、今度は鼻、頬に触れた。

「んもう……なによ、これ……え、え……これ……いや! なによこれ! この変態!」

顔の前で上下するあばれんぼうは大輔のチンポ。まさかこれを啜っていたなどと思いたくないけれど、唇から唾液の糸がそれと結ばれている。

「なんだよ、急にやる気だすのかと思っただけだよ。ほら、啜えろよ……」

ずいと突きだされるチンポに千夏は顔を背ける。

「いや、やめてよ! なによ……卑怯よ! この……んちゅ……」

唇に擦りつけられるチンポ。皮におさまり気味のそれは粘液をどろっと吐きだし、千夏の顔を汚す。

「なに言ってるんだよ。さっきまでおもいきり握ってたくせによ……。それにお前のフェラ、気持ち良かったぞ?」

「フェ……あたし、フェラなんてしてないわ!」

「ふーん……」

「なによ」

「フェラって言葉、知ってるんだな」

「な……うるさいなあ……。どうでもいいでしょ! そんなこと……」

「ま、いいさ。萩は俺のチンポをフェラしたのは事実だから」

「うう……そんな、こんな奴のこんな汚いもの……なんで、あたし……」

唇に触れるチンポを見る千夏は口を真一文字に結ぶ。これ以上口に含みたくない。そう思

うも擦りつけられるチンポは彼女の唇に粘液を擦りつける。先ほどから妙に鼻が詰まり、呼吸が苦しい。思わず息を吸うとそれといっしょに粘つく汁を……。

「ん。ぺ。ぺっ。ぺ……んちゅ！ んふうん！」

粘液を吐きだそうとした隙にチンポがまたねじ込まれる。

浅黒いチンポは脈打ち、千夏の口の中で頬肉を内側に触れてくる。

「んふう……んちゅ……ちゅう！」

噛みついてやる！ そう思うも口の中でおちんちんを噛む勇氣はなく、舌で押し返そうと試みるにとどまる。

「んお！ お、やるじゃん、萩……。うわあ、チンポキモチイいわー」

「んっ……んちゅ……ぺろ……れる……だれが……こんなもの……ちゅぺ！ ぺっ」

突きだされるチンポを舌で誘導して口から出す。顔を背け、手で握ることによってようやく安心できる位置になった。

「なんだよ、やめるのか？ ちえ、あと少しいけそうだったのにな」

「ばかじゃない！ こんなもん口に入れて……、あんた、覚えてなさいよ！ 先生に言い

付けてやるんだから……」

「くく、俺のチンポをしやぶらされたっつてか？ 学級会でそれを議題にして話すつもりか

よ？ 皆の前で、チンポ啜えたくっつて？」

「う、うるさい！ うるさい！ だまれ……」

常套句の言い付けも頼りにならず、結局は不利なまま。千夏はなんとか気落ちすまいと声を荒げるが、遠くに聞こえた物音にはっとする。誰かが来たようだ。

「……」

フェンスの隙間から下を見る。見知った顔。高尾春樹だった。

春樹のつまらない提案のせいで酷い目に遭った。原因は他にも色々絡み合っているけれど、ひとまずの憎い相手の一人なことに間違いない。だが、今だけはその存在がありがたい。

春樹は何かを探しているのか辺りを見回しており、渡り廊下の下を通ると、どこかへ行ってしまった。もしかまた戻って来たら二回分の計算になる。まだ自分はあるから一回しか達していない。散々改変されたルールだけれど、勝機が見えて来た。

「ちっ……あの野郎……」

大輔はポケットを弄ると携帯とは別の何かを取り出し、表面を撫でていた。

「しゃーねーか……、萩、サービスしてやるよ……」

「え……」

大輔は起き上がると千夏を座らせ、股座に手を伸ばす。

「あ……んっ……」

割れ目に中指と薬指をあてると、感度を確かめてからゆっくり入れ込む。

「んうふ……やめ……んっ！ ああん！ んっ！」

既に出来上がっていた千夏は甘い声を漏らし、ただされるがままになる。

「おら……いっちなまえよ……」

べとべとになった陰唇をぐりぐりと弄られる。膣口付近の敏感な部分に時折触り、煽る。「いやん。やめ、やめて……あっ！ んっ！ んふうん！ だめ！ あっ！ あっ！」

千夏の声が高くなる場所を確かめ、そこを重点的に弄ぶ。

「んっ！ んっ！ はあん！ だめえ……あひっ！ いう！ んっ！ くう！！」

間髪入れずに身体が震える千夏。背筋を丸めてがくがくと小刻みに痙攣すると、しばらく息を止めて、大きく吐いた。

「んっ！ はっ……はあん……」

涙を濡らし、荒い息をつく千夏。大輔はそんな彼女を見て指を立てる。

「二回イッたな？」

「………」

今更隠すこともできず、こくりと頷く。

最初の条件から考えればもう既に負けているのだ。もともと人が来るような場所でもなく、仮に勝ったところで大輔が約束を守るはずもないし、弱みを握られた以上、文句を言うこともできない。

だが、フェンスの隙間から三度目の往復をする春樹を見ると少し期待したくなる。

「あ、あと……一回、高尾が来たら……あたしの勝ちだから……ね」

「くそ……なんでアイツこんなところに……。しゃーねー……。でも、俺も本気でやるからな……」

「ふんだ……もう……いかないし……」

「くく、こんなにとろとろになってる奴が言っても説得力ねーし」

びっしり濡れた膣を撫で、またも喘ぐ千夏の感触を確かめる。この調子ならきつとイかせられる。あとは上手く動いてくれたら……。

「高尾君？　どうかしたのかい？」

「え？」

旧体育館付近を歩いていると、声を掛けられた。担任の志垣隆だ。

「えと、こっちのほうにボールが落ちてた気がして、探してるんです」

適当に嘘を並べる。体育館裏手は軟式野球のボールが転がっていることが多く、たまに拾いに来るので嘘とも思われまいだろう。

「そうかい。それならもつと向こうを探すといいよ。ここは今雨でぬかるんでいるから危ないんだ。ほら、行こうか」

「……はい」

本当の目的は千夏と大輔を探す事。とはいえ、もう十分探した場所なのだし、ここに留まる必要も無い。変に抵抗して勘繰られるのも困るので言うとおりにする。このまま外周を巡って探すのもいいし、大輔が何かをしているのなら隆が一緒の方が良い。そう考え、隆の後に続いた。

先に行く隆がスマートフォンを撫でているのが見えたが、特に気にもせず……。

フェンスに向い膝立ちで腰を浮かせる千夏。背をのけぞらせ、犬のように舌を出して「はっはっ」と息をしていた。

「はあん……だめえ……おねがい、やめて……もう……だめ、んあ！ んああ！ んくう！！ あ、いく、いくいく！！ いっちゃう！！」

軽く達すること既に三回。あと一回達してしまえば勝負に負ける。奥歯を噛みしめ、お尻をつねってみたけれど抵抗は無意味。

大輔の武骨な指がどうしてこんなに甘い刺激を与えてくるのだろう。女子から嫌われているがさつな彼なのに、割れ目をなぞる指使いは丁寧。ゆつくり反応をみながらなぞってくるので、少しでも声を上げるとそこを執拗に責められる。

「もういやあ……んっ！ あん！ あんあんあんあん！ んうあん！ あっ、だめえ……また……んっ！ んっ！ んっ、んっ、んっ……」

無言のまま涙を流す。フェンスに付いた手から力が抜け、膝を地面に着く。カクカクと身体を動かした後、疲労感に耐えることもできずにそのまま横になる。

「へへ……これで四回だな。お前の負けだ……」

「う、う……」

悔しさと恥かしさ、そして大輔ごときに何度も気持ち良くさせられた現実が辛い。自分一人でする時は怖くてできなかったイク感覚を無理やり、何度も与えられた。女の子の良さを教えられた。こんな奴に……。

それだけではない。さらにあのおぶよぶよした皮に包まれた赤い肉棒……。欲望をため込んだそれは涎を垂らすかのように生臭い汁を垂らし、口の中を汚してきた。あまつさえ、知らず知らずの苦しさのうちに飲んでしまった。

今更咳き込んだところで意味も無く、千夏は結果に呆然としていた。いや、深く刻まれた快感の連続に何もできなかっただけかもしれない。

「あーあ……びっちゃびちゃ……。指がふやけるっっの……」

大輔はタオルハンカチを取り出すと指を拭いていた。普段からハンカチを持ち歩くような性格でもないのに持っているところを見ると、こうなることを予想していたのかもしれない。

千夏は悔しかったが、おしっこをもらしたかのようにびしょびしょになっている股間を前に何も言えなかった。

「ふう……。とりあえず勝負は俺の勝ちな……。ま、お前みたいなブス相手じゃつまんねーな。やっぱおっぱいはぼいんで美人じゃねーとな」

「くう……」

「さて、負け犬は罰としてパンツ無しな。くく……、風邪ひくなよ？」

大輔は千夏のパンティを手を取るとすがる彼女の手を振り払い、渡り廊下を去っていく。慌てて立ち上がるうにも足がふらつき、おいすがろうとした頃には鍵を掛けられてそれもできない。



「なんでよ……なんで、あたしがこんな目に……、卑怯者、絶対許さない……」
ぺたりとその場にしゃがみ込み、ひつくひつくとしゃくりあげる千夏。涙を流すも、まだ
股間からは愛液が……。

「ボールは無いみたいだね」

「はい。おかしいな。あったと思うんですけど」

旧校舎周りのボール探しをするはめになつていた春樹は結果の出ない搜索に特に感慨も無く頷いた。そろそろ千夏を探すことに戻りたいので、何か理由を考える。

「どうかしたのかい？　なんかそわそわしてるみたいだけど」

「え？　ああ、はい……えっと、さっきこちに萩さんと緒方君が来た気がして」

「緒方君と萩さん？　ふうん。それがどうかしたのかい？」

「えと、その……、なんでこちちに行こうとしてるのかなって思つて……」

「ふうん。気になるの？　もしかしてデートしてるだけかもしれないよ？」

「それは無いですよ。だってあの二人、絶対仲が悪いはずだし……」

「そうなのかい？　高尾君が知らないこともあると思うけど」

「いや、でも、そんなこと……、だって、あんなことして……」

「あんなこと？」

「ええと、はい、その……。この前、僕ら、バレーの試合をして、それで……ちよつと悪ふざけが過ぎて……」

「ふうん、そんなことが……。まあ、萩さんからは何も聞いてないし、それは済んだことなんじゃないかい？」

「ええと、俺、それで萩さんに謝りたくて……」

「なるほど。謝りに行こうと思つて萩さんを探していたんだね。そっか」

隆は合点がいったらしくほつと笑う。

「それじゃあ先生の方からも萩さんにそれとなく頼んでみようかな。高尾君が反省してるからって……」

「本当ですか？　あ、でも……大丈夫かな……」

「ま、しばらくは萩さんの当番を代わつてあげるとかご機嫌取りすることになると思うよ」

「」

「そ、それぐらいなら全然平気です……。頑張ります」

「うん、反省してるって伝えておくよ」

「ありがとうございます。それじゃあ、俺はこれで帰ります」

「気を付けて」

春樹はほつと胸をなで下ろし頭を下げる。普段頼りないと思つていた隆だけれど執り成しに協力してくれるのであればありがたい。濤に隆の助力を受けたのだし、なんとか千夏にも謝罪の機会が訪れるかもしれない。そう思うと足取りは軽い。春樹は足早に旧校舎を後にした。

メールで呼び出され、急いで教室に向かう。

している最中は気にならないどころか興奮の材料でも乾いてしまえば不愉快な臭いでしかない。せめて洗ってから向かいかけたが、そんな余裕はなさそうだった。

大輔が教室に入ると同時に首を腕で絞められる。同時に頭をぐりぐりとゲンコツでいびられる。

「緒方君、だめじゃないか？ 高尾君が君達のことを気にしてたよ？ もし見つかってたらどうするつもりだったんだい？」

「いてて……すみません。そんな気付かなくて……」

どうやら先ほどの春樹は偶然ではなく、自分達を追ってきたようだ。もし渡り廊下まで来られていたら、見られていたら……。

そう思うと寒気がする。むしろ早めに隆に知らせて対策を取れたのだから良い仕事をしたとすら思えた。

「ったく、萩にエロイことしたいからってさ、お前、油断し過ぎ」

「そんなつもりは……ないですけど……」

「人目につくような場所を通るなって先生言ったよな？ なんで守らないんだ」

「だって、春樹が見てるなんて……」

「だってじゃないだろ。ったく……」

いつもと違い折檻付きの説教に大輔は違和感があった。普段の隆なら厭味ったらしい侮蔑の言葉を並べるだけなのに、なぜ今日は？ いつもと違うと言えは春樹につけられたこと。それはつまり、春樹に見られたくない、知られたくないということだろうか？

たかだか春樹一人に見られただけで……？ 春樹の何がそんなに怖いのか？ ただの考え過ぎだろうか……。

「で？ チビ女はどうだった？ っていうか緒方、お前なんか臭うぞ？ やった？」

「いえ、してません。手マンしただけです……処女はちゃんととっています」

「ふーん。あんなツルペタ女に興味なんてねーよ。俺そういうコンプレックスないしさ。やりたいならやって良いぞ？ 先生の言うことをきいてくれるご褒美だ」

「……げほげほ……はい」

ようやく解放され、咳き込む大輔。思考がぐるぐる巡る中、自分の生徒をなんだと思っているのかと頭を殴られた気分だった。

「……先生はなんで萩さんを？」

「別にチビなんてどうでもいいんだよ。ま、ああいうの好きな奴もいるだろうけどな。先生はパス。手ごまがあるのはべんりだろ？ 将棋と一緒さ」

「将棋っすか……」

「緒方じゃわからないか。頭使うの苦手だもんな」

「……」

事実そうなので反論はしない。だが、いつになく不機嫌な態度に違和感を覚えるぐらいの思考力はある。

何がいけなかったのか、いつもと違うのは春樹の存在。たかだか春樹がどうだというのだろう。自分のように村の有力者の子でもなく、ただの一般家庭の男子生徒。将棋で言うならそれこそ歩……。

今一つわからない。何が違うのだろうか？ 恐れる必要など無いだろうに……。

「それじゃもう帰りなさい」

「はい、失礼します」

隆は教員口調に戻るとそれだけ言い、携帯を隅々チェックしていた。小さなプラスチックの欠片を取り出して確認するとまたしまう。

あれを何か別のモノと交換したらどうなるのだろうか？

一矢報いたい気持ちのある大輔は考えを巡らせるが、それがナニを意味するパーツなのかわからず計画は白紙のまま。

用意したところで用心深い隆が対策をしないはずもない。今もこうして自分の前で執拗にチェックしているのもイタズラはできないと伝える為だろう。

大輔はやり場のない猛りを持って余しながら帰路につくほかなかった。

これで明日香にでも処理してもらえたら良いのだが、最近是不機嫌さが目立つ。やや不審な行動も見え、放課後などは理由を付けて隆の元へ行くこうとしているのを見る。

騙されているのも知らずに健気なことだと思いつつ、不機嫌な彼女に処理を頼んでもおさなりでつまらない快感にしかならないだろうと割り切る。

しばらくしたらどうせ千夏も隆にやられるのだろう。今日、彼女のマンコを舐めたけれど、明日香に比べて臭いがきつかった。処女はそういう物だと事前に教えられていたが、それなら貫通済の気にならないマンコの方が良い。

どうせおこぼれにあずかれるのだろうし、その時に思い切り中に出してやる。まだできそうにないし平気だろう。仮にできてもその時は隆こそが責任を追及される。

そんな先のことを考えいい気味と思いつつ大輔は我慢することにした……。